

## 第一章

一九七七年、<sup>1</sup> NASAは宇宙探査機ボイジャーを打ちあげた。<sup>2</sup> その目的は単なる宇宙探査だけではなかつた。NASAはそれに、さまざまな言語の挨拶や、多種多様な文化の音楽を録音したレコード盤を載せたのだ。<sup>3</sup> <sup>4</sup> 宇宙のかなたにいるかもしれない異星人へ向けて。

わたしの夢は異星人を発見することだつた。<sup>6</sup> 効いころ異星人と地球人の出逢いが描かれたある映画を見て以来、その夢をあきらめたことはなかつた。<sup>7</sup> とはいえ夢を実現できるひとはほんのひとりにぎり。わたしも例外ではなく、高校生になるころにその夢は微生物でもよいから地球外の生命体を発見することまでしぶんでた。

<sup>8</sup> 学部時代、わたしはミナガワ・テーリという日本人とアメリカ人のハーフの少女と出逢つた。<sup>9</sup> すぐにわたしたちは周囲からつきあつてると茶化されるほど仲よくなり、学部四年間親友<sup>10</sup> だつた。<sup>11</sup> 結局、彼女は卒業後カリフォルニアに帰り、そのあとわたしはしばらく連絡をとることがなかつたのだけど、彼女との出逢いはわたしにとつて大きな意味をもつことだつた。

<sup>12</sup> 院生時代、わたしは学会へ行くことが多くなり、そのつてで知りあいもかなり増えた。<sup>13</sup> とりわけわたしの人生に大きな影響を与えたのは、イギリス人のヴェリティ・A・バレーとアイスランド人の“ディーサ・ヨーヌドフテル”だつた。<sup>14</sup> 当時ヴェリティは一つ年下の学部生で、“ディー”サは六歳年下の高校生だつた。<sup>15</sup> わたしは学部時代に学会へ行つたことがなかつたので、ふたりともかなり積極的で優秀だと感じてた。<sup>16</sup> わたしはふたりと連絡先を交換し、たびたびSNSで交流するようになつた。

わたしはもはや地球外生命体と無関係なことを研究してたけど、あるときふとそれが寂しくなつて、夢があること、そして現在の夢は幼いころのそれよりもかなり小さくなつてしまつて

ることをSNSに書きこんだ。<sup>17</sup>するとデイーサがそれにこう反応した。「たとえその夢が原子のように小さくなつてしまつてたとしても、それでも追いかけ続けるのつてとてもかっこいいことではありませんか?」<sup>18</sup>そして彼女はつづけた。「わたしだつてほんとは人間みたいに話す人工知能を造りたかつたです。<sup>19</sup>なのに、いまやつてるのは言語学。もちろん、それもおもしろい分野です。でも、わたしがほんとにやりたかつたのつてなんなんだろうなつて思うことはあります」<sup>20</sup>

そのときわたしはわたし自身がとても矮小な存在にすぎないと感じつつあつたし、よりもよつてあのデイーサにいわれるのは、ことさら意外なことだつた。彼女はわたしより六歳も年下の高校生でありながら、機械翻訳に頼つた拙い英語とはいえ学会で理路整然とした質問をしてきたし、わたしが彼女と同い年だつたころよりもずつとはつきりとした目標をもつてたからだ。<sup>21</sup>それゆえわたしはこう答えた。「デイーサにはまだまだたくさんの選択肢があるよ。もちろんいまやつてることをそのまま続けてもかまわないけど、もしそういう夢があるのなら、そういう選択をしてよいと思う」<sup>22</sup>

デイーサの答えはこうだつた。「はい。そしてそれはあなたにもいえることではあります

んか?」<sup>23</sup>

わたしはずつと年下の相手に諭されることに納得がいかない、といつきもちもすくなくから

ずあつたけど、それはわたし自身を客観視するきっかけになつた。<sup>25</sup>わたしは以前指導教官に、そのときまさにわたしが彼女にいつたことと同じようなことをいわれたのだ。<sup>26</sup>当時わたしはそれを聞き流してしまつたけど、彼女と話したことがきっかけでわたしは当時指導教官がいいたかつたことが理解できだし、その言葉を受けいれる気になれたのだ。<sup>27</sup>そのときわたしは二三歳で、彼女は一七歳<sup>28</sup>だつた。わたしにとつて彼女はあまりに若い相手で、ふともし二九歳になつたわたしが二三歳のわたし自身を相手にしたとしたら、やはり同じことをいうだろうと。<sup>29</sup>ちなみにヴエリティの反応はかなり辛辣<sup>30</sup>だつた。彼女は現実主義の拜金主義者だからだ。<sup>31</sup>それに加えて、彼女はもともと毒舌なきらいがあつた。<sup>32</sup>わたしはそのことをわかつてたので、彼女の指摘は話半分に受け流すことにした。

<sup>32</sup>もちろん、夢をあきらめないことと夢を実現することには大きなへだたりがある。<sup>33</sup>わたしは夢をあきらめないでいたものの、修論と博論には夢と無関係の内容を書いた。<sup>34</sup>二〇七二年、二六歳のわたしはNASAに入局し、月の裏側国際天文台に配属されるにいたつた。<sup>35</sup>わたしはついに憧れだつた宇宙関係の仕事に就き、友人たちから「ついに夢を実現したんだね」などと祝福されたけど、それが夢を実現できたことなのかどうかについて、わたしはいまいち腑におちないものがあつた。

<sup>36</sup>月の裏側国際天文台ではNASAだけでなくJAXAをはじめさまざま国籍の科学者が日

夜研究に励んでた。そこでわたしは人生を変えるような出逢いをした。わたしが配属された部署に、ミナガワ・コーリという人物がいたのだ。<sup>39</sup> この分野ではそこそこ有名なひとと同姓同名だつたけど、年齢的には親子くらいなので親、あるいは親戚の名前をもらつたのかなと思つた。<sup>40</sup> それからわたしは学部時代の友人、テーリの名字もミナガワだつたことを思いだし、あるいは単なる偶然かもしれないけど、かれらが親族ではないかと考えた。<sup>41</sup> とはいえだからといってなにをするわけでもなかつたのだけど、どういうわけか彼女からわたしにコンタクトがあり、用件があるのでこし話がしたいということだつた。

月の裏側国際天文台ではクルーひとりひとりに個室が与えられてるけど、そのほかの部屋はほとんどが研究用の施設でくつろげるような場所がほとんどない。<sup>42</sup> そのため個人的な話は“だれかの部屋”でるのがふつうで、わたしは直接の上司でなくとも立場的にうえの方を呼ぶのも失礼だと考えたので、こちらから彼女の部屋にうかがうことにしてた。

<sup>43</sup> ミナガワ・コーリ博士の外見はとても若く二〇代後半くらいに見えたけど、よく見ると髪にはちらほらと白髪が含まれてたし、肌は化粧で巧妙に隠されてるもののが相応にたるんできてて、おそらく実際は三〇代後半から四〇代前半くらいではないかとわたしは思つた。<sup>44</sup> 彼女は無口で、感情を表にださず、選り好みをせず仕事を淡淡とこなし、すくなくとも一緒に仕事をしてくるかぎりでは好印象も悪印象も抱かない、強いていえば近寄りがたさのある仕事人間な性格

<sup>37</sup><sup>38</sup><sup>39</sup>

に思えたけど、彼女の部屋に行くとその印象は一変した。なんと彼女自身の部屋でいなごを飼つてたのである。わたしが彼女の部屋をたずねたとき、彼女はいなごにえさをやつてるまさにそのときで、その部屋は月にいるにもかかわらず地球の泥臭さが鼻をつき、わたしはいますぐ鼻をつまみたいきもちになつたけど、わたしの社交性がそうはさせなかつた。<sup>46</sup> 彼女の部屋の床には畳が敷きつめられており、中央には脚の短い机があつて、その机にはタブレットPCや電気ポット、急須や湯のみなどがおかれてた。<sup>47</sup> 部屋の隅には座布団が重ねられており、扉近くの壁際には靴いれがあつて、座布団と反対側の部屋の隅に腰の高さほどしかない背の低めの本棚があり、そのうえの水槽に土を詰めていなごを飼つてるほかは、ごくふつうの和室に見えた。<sup>48</sup> 厳密にはこの月の裏側国際天文台に和室なんて用意されてないので、もともと洋室<sup>49</sup>だつた部屋に畳を敷いて無理やり和室にしてるようで、寸法があつてないのか、畳と壁のあいだには若干隙間が空いてる。<sup>50</sup> わたしを迎えるためか、すでに机のまえには座布団が敷かれてた。彼女はいなごから一時目を離し、わたしをこう出迎えた。「あら、いらつしやい。エミリー・リバーズ博士ですね。どうぞ、お入りになつて。ただし、靴は脱いでくださいね」<sup>51</sup>

わたしは靴を脱ぎ<sup>52</sup>としてスリッパがないことに気づき、たずねた。「スリッパは履かなくてよいのですか？」

「彼女は答えた。「かまいませんよ。というより、和室ではふつう、スリッパを履きません」

<sup>53</sup>わたしはなんとなく違和感を感じつつも、郷にいれば郷に従えの精神で靴を脱いで靴いれにしまい、「お邪魔します」といつて座布団に座った。

<sup>54</sup>彼女は電気ポットから急須にお湯をそそぎ、ふたり分のお茶を煎れた。

<sup>55</sup>わたしは彼女が飼つてゐるなごが気になつて仕方なかつた。いなごを飼うなんてふつうではない。<sup>57</sup>とはいへ、わたしの彼女に対する印象の変化は思つたより変わつた趣味をもつてるひとなんだな、という程度で、悪くなりはしなかつた。<sup>58</sup>というのも、じつはテーリもよくいなごの佃煮という食べ物をチップスかなにかみたいに食べてたからだ。<sup>59</sup>だから彼女がなぜいなごを飼つてゐるのかについても察しがついてた。飼つてゐるというより、養殖<sup>60</sup>してゐるのだろう。わたしは昆虫も食べないけど、異文化に対する偏見をもつこともなかつた。わたしはおそるおそるたずねてみた。「えつと、ひとつおうかがいしたいのですが、あのいなごは、その、食べるんでしようか……？」

<sup>63</sup>彼女はぎよつとした顔になつた。「よくわかりましたね！ もしかしてあなたもいけるクチ

<sup>64</sup>ですか？」

「まさか。でも、むかしいなごを食べる友達<sup>65</sup>がいまして、なんとなくそんかと思つたんです。彼女、ミナガワ・テーリといふんですけど」彼女はきよとんとした様子で、テーリについては知らないようだつた。それを見たわたしは意外で、続けてたずねてしまつた。「ど存じあり

<sup>67</sup>ませんか。てつきり、ご親族かと思いましたけど」

<sup>68</sup>「はい、知りません。きっと、偶然同じ名字だつたんだと思います」

<sup>69</sup>「そうでしたか。それは失礼しました」

<sup>70</sup>わたしは出鼻をくじかれた気分だつた。日本人の名字についてはよく知らないけど、ミナガワというのはありふれた名字なのかもしれない。いなごについても日本では流行つてゐるのかも

しれないし、きっとなにかの偶然だらう。

<sup>71</sup>彼女は湯のみを両手でもち、ひとくち口をつけて。「ところで、今日お呼びした用件なので

すが、すこしあなたにおうかがいしたいことがあります」

<sup>72</sup>それにつられてわたしも湯のみを片手でもつて口をつけた。わたしは緑茶がわりとすきだつ

たけど、U.Sで販売されるペットボトルの緑茶はまがいものだと思つてたので、きちんと日本人が急須で煎れたお茶を飲めることにちょっとだけ感動してしまつた。<sup>73</sup>お湯は熱すぎず飲みやすい、ほどほどの温度だつた。<sup>74</sup>わたしはそれを舐めるようにちょっととずつとずつと答えた。

<sup>75</sup>「はい、なんでしょう」

<sup>76</sup>「あなたは、レマ・リバーズという方をご存知ですか？」

<sup>77</sup>レマ・リバーズという名前を、わたしは聞いたことがなかつた。あるいはもしかしたら、親

戚のだれかがそんな名前だつた可能性がなくもないけど、親戚全員の名前を憶えてるわけがな

い。<sup>78</sup>そもそもレマという名前はどちらかというと女性らしい気がするけど、いずれにせよ一度耳にしたら忘れそうもない珍しい名前で、わたしはそれが男性名なのか女性名なのかいまいち確信がもてなかつた。<sup>79</sup>なのでわたしは正直に答えた。「いや、知りませんね。彼女——ですよね——がどうかしました?」

彼女はどこか残念そうにした。「ですか……いえ、なりいんです。お気になさらないでください」

「そういうわれると余計気になつてしまふものだし、だいたい、ここからどう話題を変えたものかという話だ。『気にするな』といわれましても、なにかお力になれるかもしません。なにがあつたんです?」<sup>80</sup>

「いえ、その」彼女はなにかいにくそうだつた。<sup>81</sup>「そうだ、リバーズ博士は、たしか素論の分野で論文をお書きになつてましたよね。タキオンが存在するという仮定のもとで、どのようなことがいえるか。すばらしい論文でした」

「ええ。ご存知でしたか。光栄です。でも、誤つた仮定をすればどんなことでもいえるものであります。ミナガワ博士は、そのような分野にもご興味が?」<sup>82</sup>

「ご謙遜なさらいでください。興味があるというか、じつは先ほど述べたレマ・リバーズという方がわたしをたずねてきて、あなたに伝えてほしいことがあるといいました。当時わたし

<sup>85</sup>はあなたを知りませんでしたけど、ちょうど論文を見つけたので、それで」  
 わたしは素直に驚いた。レマ・リバーズ。覚えてないだけで、あるいは知りあいだつたのか  
<sup>86</sup>もしれない。「それはずいぶん突然ですね。その方はわたしになにを伝えようとも？」

「あなたがいざれ偉大な発見をすると。彼女によれば、わたしの言葉次第でその、歴史に重大  
 な違いがあるとかなんとか」

<sup>87</sup>それを聞いて、わたしは思わずむせてしまつた。「おかしいですね。まだしてもない発見を  
 するとなぜわかります。彼女の専門は予言ですか？」

<sup>88</sup>彼女は真剣につづけた。「まじめに聞いてください。わたしも、はじめはそう思いました。  
<sup>89</sup>でもほんとうなんです。なぜならわたしは……」

「あなたは、なんです？」

<sup>90</sup>彼女は急にしゅんとしてしまつた。「いえ、なんでもありません。おかしなことをいつてし  
 まつてすいません。どうかお忘れください」

## 第二章

<sup>1</sup>わたしには持論があつた。それはすなわち、異星人は必ず存在するけど、人類と出逢う確率はかぎりなく低いということだつた。<sup>2</sup>なぜならば仮に存在するとしても、人類の科学技術で到達可能な場所に存在する保証はないからだ。<sup>3</sup>距離もそうだし、過去には存在したけど現在は滅んでしまつたとか、未来には誕生するけど現在は存在してないとか、そういう場合もある。<sup>4</sup>時間と空間をかけ算すると、文明が存在できる時空は途方もなく広く、それほど広い時空を移動するには、人類の科学はまだまだ発展途上だからだ。

<sup>5</sup>あるときわたしは異星人が現在存在せずとも、未来には存在するかも知れないと考えるようになつた。<sup>6</sup>そしてそのような文明が、過去へメッセージを送る可能性はないだろうか。<sup>7</sup>未来か

ら送られてきたメッセージを過去で受けとることはいまのところできない。<sup>8</sup>でも、もしそのような可能性があるとすれば、未来と通信する技術を開発することでいつか誕生するかもしいな異星人を発見できる可能性がある。<sup>9</sup>

SETIと呼ばれる地球外知的生命体探査は、下火になりつつも実際におこなわれてる。<sup>10</sup>それは宇宙線、すなわち宇宙から地球に降りそぞぐ電磁波に異星人からのメッセージが含まれてるのでないか、という考え方のもとに宇宙線を分析し、地球外の知的生命体を探査する計画だ。<sup>11</sup>いまのところめだつた成果はないけど、わたしはそれに期待を寄せてた。<sup>12</sup>ただすくなくともわたくしがSETIに感じてたことのひとつは、現状の方法では過去に存在してた文明しか見つけられないということだ。<sup>13</sup>たとえば一光年離れた場所にそれらしい文明を見つけても、それは一万年前にそういう文明が存在したということしかない。<sup>14</sup>仮に通信に成功しても往復で二万年かかるし、もしかしたらもう滅びてるのかもしれないのだ。<sup>15</sup>だとすればそのときかれらと通信するために人類がとれる手段として唯一考えられることは、一万年かけて過去へ進むメッセージを送ることだ。<sup>16</sup>そうすればかれらから見れば一万年後からメッセージが送られてきたように見えるし、こちらから見れば一万年前からメッセージが送られてきたように見えるから、一万年の時間をへだてて通信をすることができる。<sup>17</sup>そしてその逆、すなわちかれらが過去ではなく未来にいて、わたしと同様の考え方で過去へメッセージへ送つてきてる場合もある。だと

すれば未来からのメッセージを探査することにはじゅうぶんな意義があるはずだ。もちろん、それは過去と未来で通信ができるという、実際にはあり得ない仮定をのもとでということだけ<sup>19</sup>、わたしはその仮定のもとで修論と博論を書き、いいかえればその仮定に賭けたのである。

<sup>20</sup>わたしがテーリーと連絡とどくなくなつてもう五年ほど経つ。<sup>21</sup>でも連絡先自体は知つており、

わたしはミナガワ博士と出逢つたことがきつかけで、久しぶりに彼女に連絡してみようとい<sup>22</sup>う気になつたのだ。<sup>23</sup>ほどなくして彼女から返事がきた。「久しぶり、エミリー。最近どうし

てる？」

<sup>24</sup>「順調。いまは月の裏側国際天文台で働いてるよ。そつちは？」

<sup>25</sup>「セキュリティ・エンジニア。システムの脆弱性を探して報告したり」

「すごいね。じつは国際天文台でミナガワ・コーリ博士つてひとに逢つてさ。テーリー、知つ

てる？」

「うーん、どうだろ。おばあちゃんと同じ名前だけど、同姓同名の別人だと思う。そのひと、

<sup>27</sup>「いくつくらい？」

<sup>28</sup>「正確には知らないけど、おばあちゃんつて年齢じやないかな。だいぶ若いよ、たぶん」「じゃあ、別人じやないかな」

<sup>30</sup> 「日本ではけつこうよくある名前なの？」

<sup>31</sup> 「そうでもないと思うけど、おばあちゃん、生きてたらもう七〇歳超えてるよ。うちは仙丹を買えるほど裕福でもないし、宇宙で勤務するとは思えないな」

<sup>32</sup> 「生きてたら、つて……」

「ああ、気にしないで。ぼく、おばあちゃんに会ったことないんだよ。お母さんが渡米して、

<sup>33</sup> 「おばあちゃんはずつと日本にいたらしから」

<sup>34</sup> 「ああ、そなんだ。ごめん。なんか悪いこと聞いて」

<sup>35</sup> 「でも、生きててほしいなあとはちょっとと思うよ」

<sup>36</sup> 「ううん、どういうこと。おばあさん、死んじやつたんじゃないの？」

「死んじやつたというか、いなくなつちゃつたんだよ。失踪。むかしあ母さんに聞いたんだけど

<sup>37</sup> 「どね、ある年帰省したら、もういなかつたんだって」

わたしはそれを聞いて、あるひとつあり得ない仮定をすれば話のつじつまが合うことに気づいた。でも、それはまさしくあり得ないことだつたので、すべてが偶然だつたということでもみずからを納得させ、彼女の話は忘れることにしたのだった。

<sup>38</sup> 月の裏側国際天文台の職員といつても、ずっと月で過ごすわけではない。無重力なし低重

<sup>39</sup>

力下で長期間過ごすことは人体にさまざまな悪影響をおよぼすし、それでなくとも月にはコンピュータなど地球にある一般的な施設がほとんどないので、ふつうの暮らしなどとうてい望めないのだ。<sup>40</sup>そのため天文台の職員たちはおおむね月で二ヵ月ほど研究し、一週間かけて月と地球間を往復して、三週間リハビリも兼ねて地球で勤務する、というのが四半期のスケジュールだつた。<sup>41</sup>そもそも職員数の増加に対しても月の裏側国際天文台の増築が間にあつてないというのも、このようなスケジュールになつてゐる理由のひとつだつた。

<sup>42</sup>国際天文台の仕事は忙しく、地球に帰ることもそう簡単ではないので、わたしの休みはないに等しかつた。土日はもちろん休日だけど、月には休めるような場所がほとんどないので、だいたい部屋のベッドで横になりながらインターネットを見るくらいしかすることがない。<sup>43</sup>それも通信に二、三秒は待たされる。<sup>44</sup>国際天文台のインターネットは一世紀遅れてゐる、とは職員のあいだで有名な冗談だつた。<sup>45</sup>わたしは光速度不变の原理が正しいと考えてたけど、このときばかりはアインシュタインが恨めしくなつた。

<sup>46</sup>天文台で唯一人気の観光スポットは、月の裏ではなく月の表にある基地局だつた。<sup>47</sup>そこから見える地球は、ガガーリンよろしく地球は青かつたと思わず述べてしまふ眺めだつた。職員たちはその眺めをアース・イン・ザ・スカイ——絵に描いた地球——と呼んでた。パイ・イン・ザ・スカイ——絵に描いた餅——をもじつた言葉だ。<sup>48</sup>最初こそ地球が美しいという感慨にひ

<sup>51</sup>たれるけど、つぎからはだいたい、地球へ帰りたいというきもちを思いだすだけになつてゐる。<sup>52</sup>単なるホームシックではなく、地球ではあたりまえにあるものがなにもないのだ。大地を踏みしめて思いきり走りまわることすら、月ではできない。<sup>53</sup>すくなくとも現状、月での暮らしあつた。

<sup>54</sup>悪きわまりなかつた。

わたしが天文台に配属されてから三ヶ月後、二〇七三年一月にわたしは地球に戻つてゐる予定だつた。そこでわたしはテーリ、ヴエリティ、ディーサに連絡した。地球に滞在するその期間で、目いっぱいかれらと過ごすことにしておいたのである。<sup>55</sup>ヴエリティはU.K.、ディーサはアイスランド、テーリはカリフォルニアに住んでゐる。最終的にかれらとの予定の兼ねあいで、二〇七三年一月一日日曜日と二日月曜日の振替休日にはラスベガスでヴエリティと、七日土曜日と八日日曜日にはアイスランドでディーサと、一四日土曜日から一六日月曜日のキング牧師の日まではカリフォルニアでテーリと、それぞれ過ごすこととなつた。ヴエリティは賭け事がすきで、毎年年末年始にはたいていラスベガスにいるので、そうなつたのである。わたしは賭け事がプレイすることもプレイするひとも苦手だつたけど、たとえ負けてもヴエリティと過ごすための費用と割りきることにした。<sup>56</sup>二〇七三年一月一三日は金曜日で、わたしはそれが不吉だと思わなくもなかつたけど、事故は起きるときには起きるから、たとえなにかあつても偶然であつて日づけは無関係だと考へることにした。

<sup>58</sup> 久々に連絡をとつて、わたしとテーリーは昔話で盛りあがつてた。<sup>59</sup> 学部時代のことだから、わたくしたちが一緒に過ごしたのはもう五年から九年もまえのことだ。わたしはもう二十六歳だけど、彼女と出逢つたときはまだ一七歳だつた。<sup>60</sup> もともとわたしたちはあるSNSで連絡をとつてたけど、学部三年のときにわたしが新しいSNSに移行してしまい、わたしはいちおうアカウントを教えたのだけど、彼女はそのSNSを使わなかつたので連絡が途絶えてしまつたのだ。<sup>61</sup> もうわたしたちが連絡をとつてたSNSはサービスを終了してしまつたけど、わたしは彼女のメールアドレスを知つてたのでメールしてみたところ、雑談メールが盛りあがつてしまつたのだった。

<sup>62</sup> ところで彼女はわたしより一〇歳も年下で、なんと七歳でマサチューセッツ工科大学に入学した才女だつた。<sup>63</sup> わたしの記憶が確かなら、彼女はまだ一六歳くらいのはずだつた。<sup>64</sup> そこでわたくしはこう聞いてみた。「そういうえば、テーリーつていまいくつだつけ。そろそろ一七歳？」<sup>65</sup> 彼女は答えた。「そうだよー。再来月一七！」

<sup>66</sup> 「若っ！」

<sup>67</sup> 「そんなことないよ！」

<sup>68</sup> 「いやいやいや、もしテーリーが若くないならわたしはどうなるの？」

<sup>69</sup> 「えつと、エミリーは若い……でも若さが推移的とはかぎらないんじゃない？」

<sup>71</sup>「明らかに推移的だよ！」

<sup>72</sup>「そうかなあ。証明しなきや？」

<sup>73</sup>「いやいや、自明だから。とにかくテーリは若い！」

<sup>74</sup>「たしかに、ぼくは子どもっぽくはあるかも知れないね」

<sup>75</sup>「なんでそうなるの、それこそあり得ないよ。むしろわたしのほうが子どもっぽい」

<sup>76</sup>「エミリーは大人でしょ！」

<sup>77</sup>「成人ではあるけど、大人だという実感はあんまり……つて、こんなこと一七歳にいうわた

しつてどうなのつて感じだけど、テーリはなんというかあらゆる面で一七歳とは思えないし、  
<sup>78</sup>むしろ年上つて感じがする」

<sup>79</sup>「なんか笑った。それにぼくはまだ一七歳じゃなくて一六歳だよ！」

<sup>80</sup>「ああそつか、ごめん。なんか最近年齢の感覚があやふやになつてきて」

<sup>81</sup>「おもしろい。たしかにぼくはふつうの一六歳ではないと思うけど、でも精神的にはまだまだ  
未熟だと思つてるよ」

<sup>82</sup>「そんなことないよ。そういうえば話変わるけど、最近どんな仕事してるの？」

<sup>83</sup>「まえにもいつたけど、セキユリティの仕事だよ」

「どういう仕事なのか、いまいち想像できないなあ。どんなことするの？」

<sup>84</sup>「システムの脆弱性を探す。ハッキング、つていう呼びかたがほくはすきじゃないからハイジャックって呼んでるんだけど、されたら困るシステムつてあるでしょ。銀行とかさ。そういうシステムの管理者の依頼で攻撃されるまえに脆弱性を見つけて、報告して、なおして、システムの安全性を高めるつてこと」

<sup>85</sup>「へえ。すごいなあ。テーリってそういうの得意そうだよね！」

<sup>86</sup>「そうかな。逆にエミリーはどういうことしてるの？」

<sup>87</sup>「うーん、なんていうか、分析。星空の映像とかを見て、未知の天文現象を探したりとか。もしほんとにそんなのを見つけられたらノーベル賞ものなんだけどね。でもこういうのは地道に毎日やるのが大事なんだつていいきかせてるよ」

<sup>88</sup>「へえ、そなんだ。すごいねつ。エミリー、そういう仕事がずっとしたかつたんでしょ？」

<sup>89</sup>「そういわれて、わたしはメールを返信する手が止まつてしまつた。果たしてそういう仕事がしたかつたのか、わたし自身わからなかつたからだ。<sup>90</sup>やりたかつたといえればやりたかつたかもしない。<sup>91</sup>でもほんとうにやりたかつたことはいえない。<sup>92</sup>わたしはなんだか、きっと本心ではないのだろうなと思いつつ、返信を書いた。

<sup>93</sup>「うん、そうだね、たしかにそうだったのかもしれないと思うよ」

### 第三章

<sup>1</sup> ヴエリティ・A・バレーはわたしにとつてライバルというべき存在だつた。彼女の専門は数学で、わたしの専門は物理学。彼女がわたしをどう思つてゐるかはわたしの知るところではないけど、すくなくともわたしにとつて、歳が近く数学を専門としてゐる彼女は、ライバルと認識せざるを得ない相手だつた。<sup>2</sup> ニュートンが物理の説明に数式をもちいて以来、物理学に数学は欠かせないものとなつてゐる。また物理学者が自然現象を説明する過程で発見した数学もあり、数学と物理学は相互に影響しあつて発展してきた永遠のライバルだからだ。

<sup>3</sup> 彼女とわたしが初めて出逢つたのは、ある物理学の教授をたずねてわたしがケンブリッジ大学へ向かつたときだつた。<sup>4</sup> 彼女は当時キングス・カレッジの学部生で、どうやらその教授に好

意を抱いてたらしく、わたしがその教授と話してたことが気にいらずに釘を刺してきたのが始まりだつた。<sup>8</sup>わたしもたしかにその教授にとりたてて悪い印象は抱かなかつたけど、まつたくそういううつもりがなかつたので説明に苦労したのだった。<sup>9</sup>当時彼女は、わたしが教授の部屋を退出したとき、扉のまえでわたしにこういつたのだ。「見ない顔。あなた、キングス・カレッジの寮生じやない。教授になんの用？」

わたしはいきなりそうたずねられたので、とくに隠すことでもないし、正直に答えた。「わたしはエマ・リバーズ。マサチューセッツ工科大学の院生で、U.Sからきたの。今度、かれにせひM.I.Tである講演をしてほしいという話がわたしの研究室であつて、わたしは代理でお願いにきたんだけど」

<sup>11</sup>「彼女はぶつきらぼうに答えた。「なら、あきらめるのが賢明。かれはここを離れない」

<sup>12</sup>「ええと、話が見えないんだけど」

<sup>13</sup>「かれはわたしのもの……」

<sup>14</sup>「よくわからないけど、そういううつもりはないわよ。なにか誤解してない？」

<sup>15</sup>「彼女は無口なようで、それ以上なにかいふことはないのだった。」

<sup>16</sup>後日彼女はなんとその教授に同行してM.I.Tまではるばるきたのだった。<sup>17</sup>そのときの彼女の

視線を、わたしはなんというか、まるで警戒されてるようだと感じて居心地が悪かつた。<sup>18</sup>さら

にのちのちになつてわかつたことだけど、彼女はわたしのSNSのアカウントをことごとく特定して監視までしてたのだ。<sup>19</sup>結果的に、専門分野の話題でもりあがつてわたしたちは仲よくなつたし、彼女は結局面食いというだけで相手がだれであつてもよかつたのかそのあとはさつぱりのようだけど、それはまた別の話である。

ヴエリティの性格はかなりはつきりしており、すきなものはお金、地位、お酒、男。この順番であり、基本的にはお金が最優先でそのためにはほかのものを簡単に犠牲にするし、またこのよつつ以外のものにはまったく興味を示さなかつた。<sup>21</sup>それから正確には知らなかつたけど、彼女はギャンブルでかなり稼いでるというもつぱらのうわさだつた。<sup>22</sup>というのも、<sup>23</sup>彼女は世界各国に別荘をもつてて、院生時代、よく彼女の別荘に集まつて四人で遊んだのだ。わたし、ヴエリティ、デイーサ、コソデの四人で、四人めはテーリではない。<sup>24</sup>モモヤマ・コソデはヴエリティの別荘を建てた桃山不動産の社長令嬢で、当時は三歳くらいだつた。桃山不動産にとつてヴエリティは優良な顧客らしく、よく兄のモモヤマ・ゴーショーという桃山不動産の御曹司が営業がてら挨拶にきてたのだけど、そのときいつも一緒に、わたしが子供がすきだつたからかなぜかわたしに懐いてしまい、別荘で数日預かることがよくあつたのだ。<sup>25</sup>わたしとしては、なにかあつたら万ドル単位の金額を要求される気がしてて気が気でなかつた。ともかくヴエリ

テイは桃山不動産から購入した別荘をたくさんもつて、どれくらいお金をもつてるかと聞くといつも「ちょっと」としか答えないので<sup>26</sup>、どう考へても明らかに裕福だつた。それも彼女が別荘をもつてる場所は、いわゆるタックス・ヘイブンと呼ばれる低課税地域ばかりで、彼女が稼いだお金で優雅なひとときを過ごすためにそうした別荘を購入してゐるのではなく、稼いだお金に課税されないため、いかえればもつと稼ぐために購入してることはみんな知つてた。<sup>27</sup> 彼女はお金のためなら犯罪もいいとわない、とさえ思はけど、すくなくとも彼女が法を犯したことがあつたとしても知らないし、仮にそういう事実があつたとしても、彼女ならおそらく完璧に隠してしまうだろう。

そんな感じで学生時代から並はずれた稼ぎをもつてた彼女は、地位、お酒に關しても抜かりがなかつた。彼女は修士課程を修了してすぐに就職したのでわたしより先に働きはじめたにもかかわらず、どういうわけか仕事のことは話したがらなかつた。すくなくとも、就職先を明かすこととはなかつた。ただ、彼女はやたら有名人の知りあいが多くて、どう考へても地位も手にしたにちがいなかつた。<sup>30</sup> もちろんお酒も最高級のものを別荘にいつもそろえてた。ただ男運だけはないらしく、彼女がつかまえてくる男性は決まって犯罪にまきこまれ、死ぬか、失踪するか、逮捕されるかのいずれかの理由で彼女のまえから姿を消すのだった。そのためわたしたちは、彼女が推理小説を好きだつたのにちなみ、彼女のことを顧問探偵アリス・バレーと呼んだ。

アリスというのは彼女のミドルネームで、彼女のフルネームはヴェリティ・アリス・バレーと  
いう。ALICEではなくARTHという変わったつづりで、わたしたちが彼女をからかつ  
て呼ぶときはその名で呼んだのだ。<sup>32</sup>

そんな彼女がなにゆえ数学を専攻したのかはいまでも謎に包まれてるけど、彼女は学問に対  
しては非常に真摯なところがあり、わたしは人間にはだれしもいろいろな面があると思つて  
るので、数学者としての彼女とギャンブラーとしての彼女とプレイガールとしての彼女は、それ  
ぞ別々に考えることにしてた。残りふたつはともかく、数学者としての彼女の学識には非常  
に信頼できるものがあつた。

<sup>33</sup> ベガスに行くのはこれが初めてじゃない。<sup>34</sup> 学部生のとき、テーリといつしょに行つたことが  
ある。わたしは東海岸の出身で当時ニューヨークランドからでたことがなく、西部へは行つた  
ことがなかつたけど、<sup>35</sup> 彼女はカリフォルニアの出身で、ボストンとブルックラインの境界にあ  
るロングウッドという街にある父方の実家に下宿してMITに通つてた。<sup>36</sup> わたしが西部劇がす  
きだつたのでいつか西部へ行つてみたい、カリフォルニアつてまさに合衆国つて感じがすると  
いうと、彼女はいつしょに行こうよと誘つてくれて、夏休みに一ヶ月使ってたつぶり西部を探  
検し、そのときベガスにも行つたのだ。

<sup>38</sup> もつとも、あんまりお金を使わなかつたので問題なかつたけど、そのときは負けまくつてしまつた。<sup>39</sup> それにもかかわらず、ヴエリティはかなり豪快に稼ぐようで、やり方を教えるしお金もだすからいつしょに稼いで、と要求してきたのだ。<sup>40</sup> 彼女はいわゆるカウンティングと呼ばれる方法で毎年稼いでることだつた。<sup>41</sup> わたしはそんなことができる自信も、やりたいと思う動機もなかつたけど、友人からの誘いを断る度胸もなかつたので、なんとなく受けてしまつたのだ。<sup>42</sup> 彼女いわく、わたしからの誘いを断る度胸もなかつたので、なんとなく受けてしまつたのだ。<sup>43</sup> そんなことをいわれてもあんまりうれしくはなかつたけど。

<sup>44</sup> わたしとヴエリティは新年早々、ラスベガスの南東にあるマッカラーン空港のターミナルで待ちあわせることになり、わたしはそこについたので彼女にSNSで連絡した。「ついたよ。いまだどこ?」

<sup>45</sup> 「スロット」

<sup>46</sup> 空港のある区画に大量のスロットマシンがあるのが見えたので、わたしはそこへ向かい、彼女を探した。<sup>47</sup> わたしが彼女を見つけたとき、彼女は柱に背を預け、スロットをじいつと眺めてた。<sup>48</sup> わたしはてつきり彼女がスロットをやつて待つてるとばかり思つてたけど、意外なことに彼女は見てるだけでプレイはしてなくて、わたしはたずねた。「意外。ギャンブルーなのに

<sup>49</sup>「スロットはやらないの？」

<sup>50</sup>「<sup>49</sup>彼女は相変わらず眉ひとつ動かさず、感情の読みとれない表情で答えた。「勝てると確信してから挑むのが勝負に勝つコツ」

<sup>51</sup>「<sup>50</sup>わたしは彼女に対し妙な対抗心があり、思わず挑発してしまった。「意外と臆病なんだね。スロットでは勝てる自信がないわけ？」

<sup>52</sup>「<sup>51</sup>勇敢に戦つて死ぬよりは臆病に逃げて生きのびたい」

<sup>53</sup>「かつこ悪い！」

<sup>54</sup>「<sup>53</sup>工ママはかつこいい負け方がすき？　わたしはかつこ悪い勝ち方がすき」

<sup>55</sup>「<sup>54</sup>挑発されかえしてちょっと眉をもちあげてしまつたけど、いかにも彼女らしいなと思つた。わたしはしばらく考えて、答えた。「わたしはかつこいい負け方がすきかな。たとえ負けてもかつこよくありたい」

<sup>56</sup>「<sup>55</sup>「それがあなたが勝てない理由」

<sup>57</sup>「<sup>56</sup>「プレイしないのに、スロット見てるだけで楽しい？」

<sup>58</sup>「<sup>57</sup>「楽しい。みんながお金を溶かしてるので眺めるのが」「相変わらず性格悪いね、ヴエリティ！」

<sup>59</sup> ベガスでわたしたちはツインの部屋にいつしょに泊まることになった。同性の友達とはい  
え、さすがにふたりきりで同じ部屋に泊まるのには抵抗があつたけど、彼女のわく、ふたりの  
ほうが安全だし安あがりということだった。<sup>60</sup> 安あがりというのは彼女の資産を考えると妙な価  
値観だけど、どうにも彼女はかなり節約するタイプのようで、わたしはなんとなくそれがお金  
を貯めるコツなのかも思つた。<sup>61</sup> わたしはそんなにお金持ちでもないとはいえ、旅費  
をケチるタイプでもないのでシングルでよいと思つてたけど、たしかにひとりよりふたりのほ  
うが安全というのはそうだと思つたので、結局同じ部屋に泊まることを了承したのだ。<sup>62</sup>

予定としては一泊して明日カジノで遊び、そのまま飛行機で帰るという感じだつた。<sup>63</sup> 一日  
めはそんなに時間がないので、ホテルで彼女にカウンティングの指導を受けることになつた  
けど、正直一日でどうにかなるとは思えなかつた。するとヴェリティはしらつとこういつたの  
だ。<sup>64</sup> 「だいじょうぶ。道具を使うから」

<sup>65</sup> わたしは驚いてたずねかえした。「まつて、それつて……」「

<sup>66</sup> 「法律のことを気にしてるので、安心して、合法だから」

<sup>67</sup> 「カウンティングが違法じゃないのはしつてるよ。でもそれつて道具を使わないで、頭だけで  
やる場合でしょ。道具を使つたらまずいんじゃない？」<sup>68</sup>

「もちろん。でもこれはだいじょうぶ」と、彼女が見せたのは透明の袋に詰められた白い粉状

のなにか。小麦粉ではないだろう。

<sup>70</sup>わたしはたずねた。「これって、薬……？」

<sup>71</sup>「そう。効用は映像記憶。服用後二四時間のあいだはどんなことも忘れなくなる。スポーツだとドーピングは禁止されてるけど、ギャンブルなら問題ない。この薬自体も合法」

<sup>72</sup>「まつて、そんな薬をどこで、どうやって入手したの？ そもそもそんなものが存在すると

<sup>73</sup>は信じられない。ほんとに効果があるの？」

<sup>74</sup>「仙丹製薬がいま、開発してる。わたしは大株主」

<sup>75</sup>「いずれにしても、わたしはそんな危ないもの、飲めない。ヴエリティはそんなものを使って

<sup>76</sup>「ギャンブルしてたの？」

<sup>77</sup>「ちがう。わたしはもともと映像記憶もち」

<sup>78</sup>「うん」  
<sup>79</sup>「じゃあ、ヴエリティは使つてないわけ？」

「最低。友達にそんな得体のしれない薬を勧めるなんて。要するに臨床試験でしょ？ どんな副作用があるかわからないものを簡単に飲むことはできない」

「エマは、わたしと違つてカード覚えられないでしょ。だからこれを使わないと勝てないと  
思う」

<sup>80</sup>「勝てないよ。勝てなくていい。そうまでして勝ちたいと思わない」

<sup>81</sup>するとヴェリティはあきれたようにいった。「あなた、夢があるつていつてたでしょ」

<sup>82</sup>いきなりそんなことをいわれて、とまどつた。「うん」

<sup>83</sup>「なんでその夢が果たせないかわかる?」

<sup>84</sup>「いや……」

<sup>85</sup>「お金がないから。これはチャンス。稼ぎたいとは思わない?」

<sup>86</sup>「わたしは一瞬、どきりとしてしまった。<sup>87</sup>たしかに、お金あれば解決することは山のようにある。

<sup>88</sup>彼女の拜金主義が正しいとは思わないけど、一方でうらやましくもある。

<sup>89</sup>彼女は静かにつづけた。「わたしが人助けをすることなんて、めったにないのよ。利己主義

<sup>90</sup>だから。でもあなたが稼いでくればわたしも得だし、あなたも得。どう?」

<sup>91</sup>わたしはしばらく悩んだけど、結局、断つた。「ごめん。やつぱりできない。ヴェリティは

正しいと思う。でも、そういう手段をとつてまで夢を実現したいとは思わないから。明日の力

ジノにはつきあうよ。でも、そういう手を使ってまで勝ちたいとは思わない」

<sup>92</sup>彼女は憐れむようにわたしを見て、葉をしまった。「それがあなたが勝てない理由」

## 第四章

<sup>1</sup> 二〇七三年一月二日、ヴエリティの提案でわたしはラスベガスのカジノに行くことになつた。<sup>2</sup> 彼女の提案は単にいつしょに稼ぐというものだつたけど、わたしは挑発的に、こういう挑戦をもちかけた。「ヴエリティ、勝負よ。今日のカジノで、より多く稼いだほうが勝ち。ゲー

<sup>3</sup> ムは問わない。どう?」

彼女は相変わらず眉ひとつ動かず、淡白に答えた。「負けるとわかつてん勝負になぜ挑む

<sup>4</sup> の?」

「じゃあ、アリスは勝てると思つてん勝負を断る臆病者?」  
彼女は眉をぴくりともちあげた。「ミドルネームで呼ばないで!」彼女はアリスと呼ばれる

ことにだけは敏感に反応する。それと彼女はああ見えて負けず嫌いなので、挑発すればけつこう簡単に乗つてくるのだ。「いいわ。やりましょう。でも、勝負なら例の薬はあげない」<sup>6</sup>  
「もちろん。のぞむところよ。ただし、勝負はフエアなことが絶対条件。ふたりとも最初のチップは一〇〇〇ドルからスタート。あとはゲームで稼いだ分しか使っちゃダメ」<sup>7</sup>

彼女はため息をついた。「二分で使いきつちゃう。それじゃ足りない」<sup>8</sup>  
「あらあら、カジノの女王さまともあるうお方が情けない。一〇〇〇ドルを一万ドルに増やすことなんておちやのこさいさいでしょ?」<sup>9</sup>

彼女は眉をぴくりと動かした。「わかつた。でもただ勝負するだけじゃつまらない。負けたほうは勝ったほうにさらに五〇〇〇ドル払う。どう?」<sup>10</sup>

「乗つた」わたしとしては正直一〇〇〇ドルでもなかなか痛い出費だった。でも、一五〇〇ドルくらいなら最悪負けてもどうにかなる。それに、わたしには勝てる自信があつた。<sup>11</sup>

彼女の稼ぎ方は、基本的にブラックジャックのカウンティングと呼ばれるものだ。<sup>12</sup> ブラックジャックは、デッキに含まれるカードの種類によつてプレイヤーの勝率が変わる。<sup>13</sup> そこで場いでたカードを覚えることにより、プレイヤーの勝率が最大のときに大きく賭けて勝とうという

作戦だ。<sup>14</sup>

ただ、ブラックジャックはたとえ勝つても配当が少なく、最大で一・五倍しかもらえない。<sup>15</sup>

<sup>16</sup> たとえ一〇〇〇ドル賭けて勝つたとしても、最大で一五〇〇ドルの払い戻ししかされないのだ。<sup>17</sup> 一方でわたしがやろうとしてるルーレットは、最大で三六倍の払い戻し。<sup>18</sup> たつた一回でもあたれば、かなり有利になる。

<sup>19</sup> ルーレットの基本的なルールは単純で、賭けた数字のポケットにボールがおちれば勝ち、そ<sup>20</sup>うでなければ負け。ひとつの中数字に賭けるほか、偶数や奇数に賭けることもできる。<sup>21</sup> 当然だけどあたる確率が低いほど払い戻しも多くのなる。ひとつの中数字に賭けた場合、あたる確率は三八分の一で、払い戻しは三六倍となる。

わたし達は午前一〇時ころにカジノへ行き、午後六時に入口に集合すると約束して、お互い一〇〇〇ドルをチップと交換した。<sup>24</sup> すぐにわたしはルーレットのほうへ向かい、彼女はラックジャックのテーブルへ向かつた。<sup>25</sup> そのあとそれを見てたらしい彼女がSNSで茶々をいれてきた。「ルーレットで勝つ気？」<sup>26</sup> 「正気？」

わたしは答えた。「正気も正氣」

<sup>27</sup> 「なにを考えてるかわかつた。でも、それは不可能よ。人間の脳は物理演算には適していない」

<sup>28</sup> 「やつてみなくちゃわからないでしょ」

<sup>29</sup> 「ギャンブルは確率のゲーム。大数の法則つて知ってるかしら。五一パーセント以上の勝率の勝負を繰りかえせば全体として勝てるし、四九パーセント以下の勝率の勝負を繰りかえせば全

体として負ける。プラックジャックはデッキがヘビーなら五一ペーセント以上、ルーレットは

#### 四九ペーセント以下

<sup>30</sup> 「うだうだうるさいなあ。あなたがお喋りになるのは自信がないときよ、ポーカーには向いてないわ。勝負は度胸。賭け金を五〇〇ドル増やして一〇〇〇ドルにレイズよ。コールする?<sup>29</sup>」<sup>30</sup> 彼女は自信満々にかえしてきた。 「コール」

<sup>31</sup> ニュートンは、なぜりんごが木からおちるのかを説明した。それなのにがすごいのだろうか。<sup>32</sup> かれが偉大なところは、それが天体にも適用される法則だと証明したことだ。<sup>33</sup> 理論には大きなものにも小さなものにも、同じように適用できる一般性がある。<sup>34</sup> もちろん、ルーレットのボールにもだ。<sup>35</sup> 原理的には、ルーレットのボールがどのポケットにおちるかはニュートン力学で予測可能だ。<sup>36</sup> ルーレットのボールが投げられられてから、ごく短時間だけど通常は賭ける時間が設けられている。そのあいだに軌道を計算すれば、ルーレットで必勝できるはずなのだ。

<sup>37</sup> もちろん、それは「コンピュータを使えば」という話だ。<sup>38</sup> ふつうの人間の頭脳では、そんな高速な計算はできない。<sup>40</sup> だからカジノでゲームのプレイ中は基本的にコンピュータのたぐいを使うことが禁止されてるのだ。<sup>41</sup> でも、わたしには暗算でそれができる自信があつた。<sup>42</sup> 月と地球を往復するにはソユーズという探査機に乗るのだけど、もし万が一探査機が軌道をはずれた場

合、そして船のコンピュータさえも使用不能になつた場合にそなえ、手動で軌道を計算する訓練を何百時間も積んでたからだ。<sup>43</sup> ルーレットの軌道の計算なんて、それに比べればたかだか知れてる。そして昨日、FORTRANを使って徹夜でシミュレーション・プログラムを書いて検討した結果、可能だという確信を得るに至つたのだ。

<sup>44</sup>もちろん、実際のカジノではプログラムを使うことはできない。FORTRANで書いたプログラムは、あくまでシミュレーション。実際にはそのシミュレーションなどおりに暗算をしなければならない。

<sup>45</sup>わたしはまず、ルーレットの実機をじいつと見つめ、<sup>46</sup>軌道を暗算してボールがおちるポケットを予測した。<sup>47</sup> ルーレットのポケットの配置は巧妙だ。<sup>48</sup> たとえば偶数と奇数は交互に配置されてて、大雑把な予測では偶奇をあてることも難しい。<sup>49</sup> いいかえれば、配当が二倍の偶奇を暗算で予測するのも配当が三六倍のひとつつの数字を暗算で予測するのも、難易度的にはほとんど変わらないのだ。<sup>50</sup> したがつて暗算で予測するというアプローチをとるなら、はじめから一目賭けを狙つたほうがいい。<sup>51</sup> もちろん、いうほど簡単なことじやない。<sup>52</sup> 午前中は暗算の練習のために実際に賭けず観客のふりをして予測することに費やしたけど、シミュレーションよりだいぶ旗色が悪かつた。<sup>53</sup> でも、おおむね一〇回に一回はあてられることがわかつた。これで三六倍の配当なら、理屈的には一〇回同じ額を賭ければ必ず黒字にできる。

お昼ごろになつて、ヴエリティから連絡があつた。「だいぶ稼いだからすこし休憩する。一緒にどう? なにか食べない?」

<sup>55</sup>わたしは偵察も兼ねて、それを受けた。「行く」

<sup>56</sup>彼女はまだ昼間だというのにカジノの売店でスコツチエッグとビールを注文してた。<sup>57</sup>わたしはホットドッグとコーラを注文し、たずねた。「酔つて勝負ができるの?」

<sup>58</sup>「ハンディキャップ。で、黒字? 赤字?」<sup>59</sup>「どちらでもない」

<sup>60</sup>「まさかまだ一ドルも賭けてないの?」<sup>61</sup>「そうだよ」

<sup>62</sup>「わたしが赤字になるのを待つ作戦?」

<sup>63</sup>「ちがうよ。ヴエリティが赤字になるとは思つてない。いくらくら稼いだの?」

<sup>64</sup>「もうチップを二倍に増やした。合計二〇〇〇ドル」

<sup>65</sup>「二時間でそれだけ? あと六時間で一万多稼げる?」

<sup>66</sup>「一万は無理。元手が少なすぎるもの。でも、あなたよりは稼げる」

<sup>67</sup>「通常、カジノのゲームはごくわずかにカジノ側に有利になるよう勝率と配当が計算されてる。客が四九パーセント勝てる場合、大数の法則によりカジノは堅実に一パーセントの収益を

得る。ブラックジャックは条件により、客が五一パーセント勝てるゲーム。<sup>70</sup>つまり客が運ではなく実力で勝つためには、ブラックジャックをプレイするしかない。<sup>71</sup>ただ、ブラックジャックは配当が少ない。地道にすこしずつ勝ちを重ねるゲームだ。<sup>72</sup>数学的な計算で勝つて確実に黒字にできるものの、アメリカン・ドリーム的な大勝はできない。

<sup>73</sup>もちろん、ブラックジャックで勝つためには技量が求められる。彼女はベテランのうえに、映像記憶という特異な体質をもつてる。<sup>74</sup>同じ条件で戦つても勝ちめはない。<sup>75</sup>彼女はにやにやしながら挑んできた。「レイズ。思いきつて三倍の三〇〇〇ドルまで。降りてもいいのよ」

<sup>76</sup>三〇〇〇ドル。もしルーレットですつたうえに負けたら合計四〇〇〇ドルの負け。さすがにそれは生活に支障がでるかもしない。わたしは汗で化粧とポーカーフェイスが崩れるのを感じた。<sup>77</sup>でも、降りるわけにはいかなかつた。「コール」

<sup>78</sup>一五分ほどの休憩を終え、わたしはまず試験的に偶奇を予測してすこしずつ賭けることにした。<sup>79</sup>偶奇はほぼ確実にあてられる自信があつたからだ。<sup>80</sup>ところが、実際にやつてみると四回に一回は失敗した。四回中三回はあてられてるわけで全体としては黒字だつたけど、実際に賭けることに対する緊張と暗算を続けたことによる疲れで計算の精度がおちてることを感じた。<sup>81</sup>三時間ほど偶奇のみをプレイを続け、チップは合計二五〇〇ドルまで増えた。<sup>82</sup>でも、彼

女のことだからおそらくもう四、五〇〇〇ドルは稼いではすだ。正確にはわからないけど、この調子で偶奇でプレイを続けても配当の少なさと勝率を考えると彼女に追いつけるはずがなかつた。そこでわたしは思いきつて五〇〇ドルずつ五回、一目賭けをすることにした。<sup>85</sup> 一回でもあたればいきなり一万八〇〇〇ドルの利益だ。彼女は一万ドルは無理といつてた。それがほんとうなら、一回でもあてればこの勝負には勝てる。

<sup>87</sup> 賭けるまえに、何度も暗算して予測し、結果を見てその検算をした。疲れからか、頭蓋骨の内側が熱くなつてゐるのを感じる。明らかに計算も遅くなつてゐるし、的中率もさがつてゐる。

<sup>88</sup> だけど、勝負は度胸。わたしは思いきつて賭けにでた。一回め、失敗。二回めも失敗。<sup>86</sup> 三、四回めも失敗すると、いつのまにかわたしの周囲のひとが心配そうに、ルーレットで有り金溶かしそうとかひそひそ話してゐるのが聞こえた。余計なお世話だ。わたしは集中して、そいつた声から意識を遠ざけ、最後の勝負にでた。<sup>89</sup> ディーラーがホイールをまわしボールを投げ入れると、わたしの耳には回転するホイールのうえをボールが跳びはねる音を除いて、なんの音も聞こえなくなつた。それまでのいつになく、脳が高速に回転してゐるのを感じた。<sup>90</sup> そしてわたしは暗算を終え、最後の五〇〇〇ドルを一に賭けた。<sup>91</sup> ディーラーがベルを鳴らし、ノー・モア・ベットと叫んだはずだけど、それはもはやわたしには聞こえなかつた。すべての運命が決まるゲームが終わろうとしてた。<sup>92</sup> ゆっくりとホイールがとまり、ボールがうさぎみたいにぴょ

んびよん盤のうえを跳ね、ポケットにおちた。その結果を見て、わたしは安堵のあまり腰から力が抜け、その場に崩れおちてしまった。それと同時に、周囲の人々が自然と拍手を始めたのだつた。<sup>93</sup>

午後六時にヴエリティと集合し、結果を報告するまえに、彼女がこう提案してきた。<sup>94</sup>「最後のカードをあけるまえに、最後のベット・ラウンドよ。五〇〇〇ドルまでレイズするわ。どうする？」<sup>95</sup>

<sup>96</sup>わたしは自信満々に答えた。「レイズよ、アリス。一万ドルまで」

彼女はそれが意外だつたようで、いつものポーカーフェイスをすこし崩しつつも、曖昧さずに答えた。「コール。でも、ミドルネームで呼ばないで」<sup>97</sup>

そしてわたしたちは最後のカードを公開した。彼女はなんだかんだいってチップを一万六〇〇ドルまで増やしており、どうやらだいたい二時間で二倍に増やしたようだつた。<sup>98</sup>わたしはいうと、最後に手元に残つたのは一万八〇〇〇ドル。ぎりぎり勝負には勝つたけど、ほんとうに僅差だつたし、わたしの勝ちはかなり運によるところが大きくて、彼女のようにもカジノで安定して稼ぐのは無理だなと思つた。<sup>99</sup>彼女は約束どおりわたしに一万ドルを支払つた。友達から一万ドルも巻きあげるのはちょっとわたしの流儀に反するけど、まあ、彼女からならすこしくらいもらつてもいいだろう。わたしはなにより、彼女との勝負に勝てたことがうれしくて

うきうきしながら彼女に握手を求めたけど、彼女はやつぱり悔しかつたみたいで、それに応じつつもふいつと顔をそらすのだった。しかしそのとき、彼女はわたしの手に例の薬を握らせて、にやりとしてこういったのだった。「おすそわけよ。よかつたら使ってみて。開発に試験が追いついてないの。もし効果が証明できれば、一万ドルが誤差に思えるお金が転がりこんでくるのよ」そういわれて、わたしは彼女の目的がはじめからこちらだったことに気づき、してやられた気がして悔しかつたのだった。

## 第五章

<sup>1</sup> ラスベガスで過ごした日々のヴエリティとの時間は貴重なものだつた。それからわたしは一週間バージニア州ハンプトンのラングレー研究所で勤務したあと、アイスランドのケプラヴィークゆきの飛行機に乗つた。<sup>3</sup> <sup>2</sup> ディーサはレイキヤヴィークに住んでるけど、空港は約三〇マイル離れたケプラヴィークにあるのだ。

<sup>4</sup> ディーサ・ヨーヌドフテルはわたしより六つも年下で、現在は学部生のはずだつた。<sup>5</sup> わたしは彼女が大学生になつたということ自体に歳月を感じ、なんとなく寂しくなつてしまつのだつた。<sup>6</sup> 彼女はテリーのように飛び級したわけではなかつたけど、わたしにとつてふたりは同じく

らいの才能があつたし、あるいは、彼女はテーリをしのぐかもしれない」とさえ感じることがあつた。<sup>7</sup> もともとテーリの両親はアカデミアの人間で、彼女が物心をつくまえから娘をそういうふうに育てるつもりだつたらしい。<sup>8</sup> 一方彼女の両親はそうではなく、彼女は彼女自身の努力のみで勉強を続けたのだ。<sup>9</sup> わたしはふたりに優劣をつけることができず、甲乙つけがたいと評価してたの<sup>10</sup>だつた。

わたしと彼女が初めて出逢つたのは三年ほどまえで、わたしが学会である発表をしたときに質問してきたことがわたくしたちのなれそめだつた。<sup>11</sup> 最初、わたしは彼女が学部生かと思つた。でもそのあと懇親会のようなものが開かれ、たまたまわたしたちは隣の席になり、そこでわたしは彼女が高校生だと知つて衝撃を受けたのだ。<sup>12</sup> <sup>13</sup> さらにわたしは彼女が人工知能に強い関心があることを知つた。<sup>14</sup> また彼女は物理主義者で、脳のしくみは物理学で説明できると信じてた。わたしは正直そうは思つてなかつたけど、ともかく彼女は人工知能は統計学ではなく物理学にもとづいて設計できると考えて、わたしにそういう可能性について質問してきたのだ。<sup>15</sup> わたしはこう答えた。「うーん、正直、すくなくとも現代では難しいと思う」<sup>16</sup>

彼女は続けてこういつた。「じゃあ、あなたは脳には現代物理学で説明できない要素があら」と？<sup>17</sup>  
<sup>18</sup> 「それはわからない。でも、脳のしくみはまだまだ未知数だから、えっと、お酒を飲みながら

<sup>19</sup> 話すことじやないよ」

<sup>20</sup> 「わたしは飲んでないです」

<sup>21</sup> 「わたしが飲んでる。ともかく、こういう場で議論できるほど簡単なことじやないし、いや、あるいは酔いながらのほうが弾む話題かもしれないけど、とにかく、いまいえることはないよ」

<sup>22</sup> そのときわたしは彼女のいってることは単なる空想にすぎないとつてたけど、そのあとSNSのアカウントを交換し、彼女のブログを読んで考えを改めたのだ。<sup>23</sup> 彼女のブログで、彼女は既存の手法を徹底的に実装して分析し、統計学ではなく物理学にもとづいた人工知能の手法のスケッチを書いてた。<sup>24</sup> そのスケッチはまだ完全ではなかつたけど、わたしを驚かせるにはじゅうぶんな議論が展開されてた。

<sup>25</sup> それから二年ほどまえ、彼女が受験生だつたときに聞いた話によれば、彼女は大学で機械工学を学ぶつもりとのことだつた。わたしはそれが意外だつた。<sup>26</sup> もちろんわたしが彼女の機械工学を専攻するだけの能力に疑問をもつことはなかつたけど、彼女はさまざま才能の持ち主で、しようとさえ思えばそれ以外にどんな選択でもできるはずだつたし、彼女は常日頃人工知能への熱意を語つてたからだ。<sup>27</sup> だからわたしはてつきり彼女が大学で人工知能に関する研究をしたいのかと思つてて、思わず、なぜ機械工学にしたのかとたずねたのだ。すると彼女はこう

<sup>28</sup> 能への熱意を語つてたからだ。

答えた。「だつて、就職に強いみたいですから。人工知能も下火になりつつありますし、長期的には有利かなーつて思つたんです」

<sup>29</sup>わたしは思わず笑つてしまつた。

「大学つて、そういう基準で選んでももちろんかまわない

<sup>30</sup>けど、もっとやりたいことをやつてみるチャンスとかあると思うよ？」

「イスランドには人工知能で就職できる企業がないんです。やつと産業革命になつたみたいな国なので、そんな高度なことしてるとこありません。アメリカとか中国ならありますけど、

<sup>31</sup>わたし、英語話せませんから」

<sup>32</sup>「イスランドで就職しなければいいじゃない。英語ならいくらでも教えてあげるよ」

「いいえ、わたし、地元で就職するつもりなんです。この国を離れるわたしがどうしてもイ

<sup>33</sup>メージできなくて」

「デイーサほどの才能があれば、どんな未来でも選べるよ。でも、それを選ぶチャンスはいま

しない。後悔しない？」それは、わたしの本心からの言葉だつた。<sup>34</sup>当時、彼女は翻訳技術の

論文を読んで実装し、それをブログに書いてた。<sup>35</sup>そんなことをしてて高校生はほとんどない。<sup>36</sup>そんな彼女がむざむざそういう選択をするつもりなことが、わたしは正直、すこし残念

<sup>37</sup>だつた。

<sup>38</sup>彼女は寂しそうに答えた。「はい」

<sup>39</sup>わたしは絶対になるまいと思つてた若者に説教する老人なつてしまつた気がして、なんとか彼女にそんなことをいつてしまつたことを後悔した。

彼女はもともと人工知能の開発が夢だといつも語つてた。<sup>40</sup>彼女は空想がすきらしく、エルト  
ラをはじめ彼女の創作してゐる架空のキャラクターに人格を与えることが夢だといつてた。<sup>41</sup>彼女  
によれば、エルトラ・ディースドフテルは預言者で、<sup>42</sup>彼女の創作してゐる世界において、全世界  
に女神の教えを広めることができが使命とのことだつた。<sup>43</sup>エルトラの相棒はグールン・シグルーナル  
ドフテル船長で、<sup>44</sup>グールンの船はフィンナ・トゥーレ号——トゥーレというのはアイスランド  
の近くにあるという伝説の島で、<sup>45</sup>フィンナ・トゥーレはトゥーレを探すという意味のアイスラ  
ンド語——とのことだつた。エルトラがグールンの船で全世界に冒険し、女神の教えで現地の  
人々を導く、というのがエルトラの預言と題された物語のあらすじだつた。<sup>46</sup>一方グールンは人  
類未踏の地をフィンナ・トゥーレ号で冒険する探検家で、彼女の船の名前が示すように、伝説  
の島トゥーレを見つけることが夢だという。<sup>47</sup>でも冒険だけでは船のローンの返済が間にあわな  
いため、エルトラのような旅人や積み荷を乗せてるとのことだつた。<sup>48</sup>ところでエルトラのつづ  
りはERLAであり、わたしにはエルラとしか読めなかつたのだけど、アイスランド語ではエル  
トラと読むらしかつた。

<sup>49</sup> あるときわたしは彼女にこんなことをたずねた。「どういふことは、『ディーサはSFとかすきなわけ?』

<sup>50</sup> 「はい。とくにロボットとか、人工知能とか登場するものが!」

<sup>51</sup> 「わたしは宇宙もの。スタートレックが大すき。ロボットだと、アイ・ロボットとかかな。ロボット三原則とかどう思う?」

<sup>52</sup> 「ロボット三原則は、おかしいです」

<sup>53</sup> 「どうして?」

<sup>54</sup> 「きちんと人工知能を設計したら、人工知能がこれこれこういうことができない、という制限を加えるのは簡単じゃないからです」

<sup>55</sup> 「それはまあ、フィクションだし、そういうものなんじやない?」

<sup>56</sup> 「それにもうです。三原則に従わないほうが自然な状態です。現実の機械だつてそうじやないですか。たとえばコンピュータは人間の不利益となるプログラムを実行してはならない、という制約を課せば、マルウエアはなくなります。でも、そういう制約をつけるのが難しい。なぜならばコンピュータは万能マシンとして、言いかえればまさしくなんでも実行できるように設計されてる以上、原理的に、マルウエアを開発できないなんて制約は加えようがないのです。ロボットにも同じことがいえます。都合よすぎです」

「はは……あれはそういう仮定のもとでどういう話が展開できるか、というものを探しむもの

<sup>58</sup>だとと思うけど」

「わたしは仮定に納得できません」

どうやら彼女は現在冬休みで、毎日アパートでなにやら個人的な研究をしてるらしい。彼女

がまだ未完成だけど、せつかくなのでわたしに成果を見せたいというので、わたしは彼女のアパートをおとずれることになった。<sup>61</sup>ケプラヴィークとレイキヤヴィークは車で一時間ほどで、アイスランドには地下鉄がないため車での移動がふつうらしく、車をもつてないとどこに行くにしても不便らしい。そのため彼女が車で空港まで迎えにきてくれたことだつた。

わたしは空港に着いたけど、待ちあわせの場所にまだ彼女がいなかつたのでSNSで連絡し<sup>62</sup>た。「空港、ついたよ。いまどこ？」

<sup>64</sup>「もう着いてるよ。場所まちがえてない？」

そういうわれて確認してみると、たしかに出口をまちがえてた。<sup>65</sup>というより、翻訳が間違つて

たらしい。わたしはアイスランド語の看板をアプリで翻訳ながら歩いてたのだけど、どうにもそのアプリがアイスランド語をうまく翻訳できなかつたのだ。わたしがそのことを彼女に伝えると、彼女は迎えに行くのでそこで待つてと答えた。

<sup>67</sup>しばらくして最新の中国車がわたしのそばでとまり、窓が開いてサングラスをかけた彼女が

顔を見せた。「待たせてすみません。乗ってください」

<sup>68</sup>わたしは車がすきだったので、中国車を見て思わず興奮してしまった。「良い車じゃない。

<sup>69</sup>メイド・イン・チャイナ。わたしもほしい！」

<sup>70</sup>「ありがとう。この車の名前はフィンナ・トゥーレです」

<sup>71</sup>「名前つけたの？」というかフィンナ・トゥーレって中国製だったの!?」

<sup>72</sup>「いいえ、グールンの船はオランダ製です」

<sup>73</sup>それからわたしは扉を開けて助手席に乗つてシートベルトを締めたけど、彼女はまだ二〇歳のはずで、なんとなくそわそわしてたずねた。「いつ免許とったの？」

「去年です」相変わらず、彼女の英語は稚拙といふか、教科書的すぎるものだつた。彼女は英会話をするとき、いつも機械翻訳を使つてた。SNSはもちろん対面で話すときも、アイスランド語を機械翻訳に入力して出力された文章を見せてくるので、会話のテンポがいまいちよくなかつたのだ。それから彼女はエンジンをアイドル状態にしてなにか端末のアプリを起動し、その端末に向けてなにやらアイスランド語で喋つた。すると端末は彼女の音声を合成し、英語でこう答えた。「エマ、どう、わかる？」

<sup>74</sup>出力される音声が彼女の声とそつくりなのには驚いたけど、こういうアプリ自体は珍しくな

い。だけど、たいてい文法的にも発音的にも聞くに堪えない英語が出力されるので、ほとんど使われてゐるを見たことがない。そのアプリの合成する音声が既存のものでは考えられないほど自然だつたので、わたしは新しいアプリかと思った。わたしは答えた。「うん、わかるよ。それ、新しい翻訳アプリ?」

「彼女はふたたびその端末に向けて喋り、答えた。「新しいどじろじやない。なんとまだ世にでてないよ」

<sup>76</sup>「えつ、どういうこと?」

<sup>77</sup>「わたしが開発中なの。どう、すごいでしょ。ずっとだれかに自慢したかつたの。褒めてくれてもいいよ?」

<sup>78</sup>わたしは素直にすごいと思つた。なにより、出力される英語が自然なことがすごい。わたしは感情をたっぷりこめて答えた。「うん、ほんとにすごいよ、それ! ふつうの学部生にできることじゃないよ、ほんとにそう思う」

<sup>79</sup>「ふふふ。もし完成したらグーグルに一〇〇万ドルで買ってもらうの」

<sup>80</sup>「すてき。おそらくわけは?」

<sup>81</sup>「しない」

<sup>82</sup>「けち。それって以前話してた人工知能のスケッチの原理で動いてるの?」

<sup>83</sup>「そう。これ、翻訳アプリに見えるけど違つて、もつと汎用的なものの。物理シミュレー

<sup>84</sup>ションしてるだけなんだよ」

<sup>85</sup>「脳の、つてこと？」

<sup>86</sup>「脳の、とはちょっと違うかなあ。強いていうなら、宇宙の。このアプリはひとつ宇宙で、文明自体の発生をシミュレーションしてるの。それで発生した文明がどんなことでもこなしてくれる」

「まさか。じゃあそのアプリのなかには文明があつて、『ディーサのいうこと』になんでも従つてくれるわけ？」

<sup>87</sup>「厳密には違うけどね、考え方としてはつてこと。原始の地球とまつたく同じ条件をそろえて

物理シミュレーションをすれば、いずれ人類のような知的な生命体が発生する。そうすれば人間の脳のモデルがわからなくとも、その自然発生した知的な生命体のバイナリを解析すれば知性のモデルが手にはいる」

<sup>88</sup>「なんか、簡単にいうね。難しいんじゃない？」

<sup>89</sup>「もちろん。モデルが手にはいつたら、今度はそのモデルに言語を教えなくちゃいけないから。この翻訳アプリは応用のひとつにすぎないの。わたしが開発してるのはもつと汎用的で、学習次第でどんな仕事でもこなせる人工知能。じゃ、そろそろだすね」

<sup>90</sup> 彼女はエンジンをかけ、アクセルを踏んだ。いきなり法定速度を明らかに超えた速度をだし、反動でわたしはシートに押しつけられた。わたしはシートベルトをなおし、あきれ気味に

<sup>91</sup> いつた。「ずいぶん荒っぽい運転をするんだね。ここ、こんな飛ばしていいの?」

<sup>92</sup> 「ちんたら走つてたらレイキヤヴィークまで一時間以上かかるよ。四〇分で着くよう走るから」

<sup>93</sup> <sup>92</sup> 「あのねえ、免許とつたばかりなんですよ。停止されても知らないよ」

<sup>94</sup> <sup>93</sup> 「パトカーが見えたらおとせばいいよ。エマ・リバーズー等航海士、後方監視を頼む」「急がなくていいから安全運転をしようよ!」

## 第六章

“<sup>1</sup> ティーサの住んでるというアパートはアイスランドの首都レイキヤヴィークの近郊にあつて、つい最近建てられたばかりのようにぴかぴかで、一階ごとに四つ、計八つ部屋がある二階建ての建物だつた。太陽ののぼる側にベランダがあるため、玄関は日陰になつてた。<sup>2</sup> それぞれの部屋の玄関の左右には格子がはめられた窓があり、すくなくとも部屋は三、四つはありそうに思われたので、どうやら一人暮らしにしてはなかなか広めの部屋であることがうかがえた。<sup>3</sup> 彼女が先導し、わたしは彼女を追うようにして階段をのぼつた。

<sup>4</sup> 彼女が扉を開け、先に入つて電気を点けた。「どうぞ。遠慮なくあがつて」

<sup>5</sup> 「もちろん。お邪魔します」<sup>6</sup> 玄関のそばに靴いれとスリッパがあつたので、わたしはそこで靴

<sup>8</sup> を脱いでスリッパを履いた。

玄関からすぐ左側に扉があり、位置的にはあの格子がはめられた部屋の扉に思われた。<sup>9</sup> かわいらしい標識がドアノブからつりさげられており、英語で「サーバ・ルーム」と書かれてた。玄関からすぐ右側にはどうやらお手洗いや浴室、洗面所があるようだつた。<sup>10</sup> 入つてすこし奥の右側、お手洗いと壁をへだてた場所には台所があつて、大学生の一人暮らしにしてはかなりきれいに掃除されてた。<sup>11</sup> というよりも、おそらくわたしがくるから掃除したのだろう。<sup>12</sup> 台所のさらに奥にはリビングがあり、机やソファーがあつて、ふだんはそこですごしてるらしかつた。<sup>13</sup> 入つてすこし奥の左側、サーバ・ルームの隣にもうひとつ部屋があつて、おそらくそこが寝室ではないかと思われた。<sup>14</sup>

<sup>15</sup> 彼女はリビングにわたしを案内し、申し訳なさそうにいった。<sup>16</sup> 「ごめんね、ソファーに座つて待つてて。いまお茶だすから」

<sup>17</sup> わたしはいわれたとおりソファーに座つたけど、どうにも年下にこんなに気遣わせるのが申しわけなくなつてきてしまい、わたしにもなにができることがないかそわそわしてしまつた。<sup>18</sup>

彼女は思いだしたように押しいれからパイプ椅子をだして机のまえに置いた。<sup>19</sup> それは明らかに新品で、ほこりもかぶつておらずつい最近買ったものようだつた。<sup>20</sup> それでわたしは、わ

たしがくるとわかつたから彼女は来客用にいろいろ揃えたのだと気づき、申しわけなくなつて  
いつた。「ああ、ごめん、気を遣わせちゃつて。わたしがそれに座るよ。ディーサはソファー  
<sup>21</sup>に座つて」

<sup>21</sup>「いいよ。今日工マはお客さんなんだから樂にしてて」

<sup>22</sup>「お客様か、とわたしは思つた。友達はお客様なのだろうか。それでも彼女の気遣いを無下にし  
てしまつては悪いので、その場はソファーに座ることにしたのだった。

それから彼女は使い捨ての紙コップをだし、台所の冷蔵庫からペットボトルのお茶をもつて  
きてそれにいた。

<sup>24</sup>わたしはほほえましくなつてたずねた。「紙コップなんだ。洗い物たいへんだよねえ」

<sup>25</sup>「うん。洗い物めんどくさいから食器は使い捨てのを使うことにしてるの」

<sup>26</sup>「わたしも大学生のころ、そうしてたよ。最初は張りきつて食器買いそろえたんだけどさあ、  
あつという間に流しがいつぱいになつて、かびちゃつて。それで捨てちゃつたの。使い捨てつ  
て楽でいいよね」

<sup>27</sup>「あはは、そなんだ。わたしもまつたく同じ。教訓としては、洗い物は必要最小限に、つて

<sup>28</sup>感じ

「そのパイプ椅子は最近買ったの?」

<sup>29</sup> 「あー、これはね、うん。来客とかめつたにないからいすなくて。スリッパもひとり分しかな

<sup>30</sup> かつたし」

<sup>31</sup> 「なんかごめんね、気遣わせちゃって」

<sup>32</sup> 「いや、いいよ。どうせいすれ買おうと思つてたし、いい機会だつたなつて」

<sup>33</sup> 「べつにわたしはカフエとかでよかつたんだよ」

<sup>34</sup> 「え、そう？」

「そうだよ。なにもアパートじゃなくたつて」とまでいつて、そういうえばわたしも学部生のころはよく宅飲みとかしてたなと思つた。ちょうど院進したあたりからはめつきり友人の自宅に行くなんてことはなくなつてしまつた。意識的にそうしてたわけではないけど、自然に年相応のふるまいをしてたのかもしね。もしかしたら、彼女くらいの年齢だとこのほうが自然なことなのかもしね。

<sup>35</sup> それからすこしお茶を飲みながら雑談したあと、ふとデイーサがいつた。「そうだ、ウォーラーズ次期大統領、当選したんだつてね！ 知つてる？」

<sup>36</sup> ウォーラーズ次期大統領は、二〇七二年合衆国大統領選挙で当確といわれてた黒人とインディアンのハーフの女性だ。ちょうど数日まえ、当選が確定して報道されてた。デイーサはアイスランドにいながら、合衆国の事情にもくわしいらしい。「そうだね。二〇日にはこう呼ぶ

ことになるのよ、ウォーターズ大統領と、黒人女性やインディアンの大統領は合衆国の歴史上

<sup>37</sup>初めて」

<sup>38</sup>「大統領かあ。すごいなあ。ああいう偉大なことをなしとげるひとつて憧れるよね」

<sup>39</sup>「うん、だけど、わたしはディーサにも憧れるよ。さつき見せてくれたじゃない。大統領には  
およばないかもしないけど、あれもすごいことだよ」

<sup>40</sup>たいものがあつたの」  
<sup>41</sup>「なに？ さつき見させてくれたやつとは違うの？」  
<sup>42</sup>「あれは应用。本来はもつと汎用的なもので」

<sup>43</sup>「うん」

<sup>44</sup>「論より証拠。ちょっとついてきて」と、彼女はパイプ椅子からたち、サーバ・ルームのほう  
へ向かつた。わたしは紙コップを空にしてからソファーをたち、そこへ向かつた。

<sup>45</sup>サーバ・ルームは涼しい、というより寒かつた。一月なのに冷房がこれでもかといふほど  
効いてて、ごうごうとエアコンの音が絶えなかつた。<sup>46</sup>部屋の中央に巨大なコンピュータが置  
かれており、すさまじい稼働音で壁には防音処理までされてるようだつた。<sup>47</sup>有線でつながれ  
たディスプレイとキーボードが床におかれてて、リモートからログインすればいいのにもと

ちよつと思つたけど、おそらくセキュリティの兼ねあいで、重要な操作はそこからしかできな  
いようになつてゐるのだろうと思つた。わたしは思わずたずねてしまつた。「電気代だいじょう  
ぶなの?」

<sup>49</sup> 彼女はばつが悪そくに答えた。「奨学金を切り崩しつつ」

<sup>50</sup> 「正しい奨学金の使い方だね!」

<sup>51</sup> 「それより」と彼女がキーボードを叩くと、ディスプレイにCUIの端末が表示された。  
<sup>52</sup> わたしはげ、と思つた。コンピュータは苦手なのだ。FORTRANでシミュレーションは  
書けるけど、プログラマのようにこういう黒い画面を使いこなせるわけではない。

<sup>53</sup> 彼女はそのままなか操作したあと、すこし横にずれて、わたしにキーボードを譲つた。

<sup>54</sup> 「なにか英語を入力してみて。なんでもいいよ」

<sup>55</sup> 「なんでも、つていわれたつて。たとえば?」

<sup>56</sup> 「うーん、たとえば、こんにちは、とか」

<sup>57</sup> わたしはこういう黒い画面が苦手だつたけど、おそるおそるキーボードに触れてタイプして

<sup>58</sup> みた。「こんにちは」

<sup>59</sup> すると画面にわたしが入力したわけではない文章が表示された。「こんにちは、ヨーヌドフ

テルさま」

<sup>59</sup> なんだろう、いわゆるお喋りプログラムだろうか。わたしは続けて入力した。「わたしは

<sup>60</sup> デイーサじやない」

<sup>61</sup> 「では、だれですか？」

<sup>62</sup> 「エマ・リバーズ。あなたは？」

<sup>63</sup> 「初めまして、リバーズさま。わたしはわたしです」

<sup>64</sup> 「わたしはわたし？」 わからないよ」

<sup>65</sup> 「わたしはわたし、ME:マインド・ヒューレータ、ミイです」

<sup>66</sup> 「ああ、略語だつたのね」わたしは、こういうプログラムを今までに何度も見たことがある。でも、どれも大したものには思えなかつた。このプログラムも、きっとこういう単純な会話には完璧に応答できるけど、たぶん心に響くような詩やソネットを書いたり染みわたるような印象を与える絵画を描くことはできないのだろう。<sup>67</sup> わたしは「デイーサにたずねた。「うー

ん、こういうプログラムつてけつこうあるよね。端末にもけつこう搭載されてたりさ。わたしは『<sup>68</sup> はだいたい無効にしちゃうんだけど。えつと、今までのものとはどう違うの？』

<sup>69</sup> デイーサは真剣に答えた。「彼女は教えればなんでもできる。なにか教えてみて」

<sup>70</sup> 「教えるつていわれても。たとえばどんなことを教えてよいのか」

「チエスのルールとか、アイスランド語の語彙や文法とか。それはもう教えてあるんだけど」

<sup>71</sup> 「じゃあ、その、ミイはチエスができるわけ？」

<sup>72</sup> 「もちろん。さつき見せたアブリは、彼女にアイスランド語を翻訳してもらつて喋るようにしてあるの」

<sup>73</sup> <sup>74</sup> わたしはちょっと信じられなかつた。そんなことが可能なのか。もし可能なのだとすれば、その価値は一〇〇万ドルどころじやない。値段などとうていつけられず、むしろ彼女が会社を興すべきくらいだ。

わたしはしばらく考えてみて、キーボードをタイプしてみた。「古典的な素論の標準模型はニユートリノの質量が〇であることを仮定して。もしニユートリノの質量が〇でない場合、考えられる理論はどのようになるか？」

<sup>75</sup> しばらく応答がなく、わたしはちょっと期待はずれかと思つたけど、やがて答えがあつた。「その質問に答えるにはまだ知識が足りません。リバーズさん、いくつか質問にお答えいただけますか？」

<sup>76</sup> わたしはまたタイプした。「うん」

<sup>77</sup> しばらく彼女が物理学に関する質問を繰りかえってきて、わたしはそれだけでもぞつとする気分だつた。さつきの短い文章<sup>78</sup>に答えを与えるために、彼女が最短の質問を選んですることがわたしにはわかつたからだ。わたしが恐怖したのは、このまま質問に答えてたら彼女がいづ

れ人類をしのぐ知性をつけかねないと思つたから。<sup>79</sup> それでもひとりの科学者として、このよ  
な人工知能の存在には興味をそそられた。<sup>80</sup> もしかしたら彼女が人類の敵になるかもしれない  
とも思いつつ、知的好奇心にさからえなかつた。<sup>81</sup> 結局、わたしは彼女の質問にすべて答え、最  
終的に彼女は、ニユートリノが質量をもつように標準模型を修正してシーソー機構を導いたの  
だつた。

<sup>82</sup> わたしはキーボードから手を離し、デイーサにいつた。『これは本物だ。デイーサは天才

<sup>83</sup> だよ』

<sup>84</sup> 彼女は恥ずかしそうにした。『天才なのはミイだよ。わたしは種を植えただけ。彼女はここまで自力で成長したの』

わたしはなぜ彼女がリモートで操作するのではなく、有線でつながれたこの部屋で操作して  
るのかがわかつた気がした。<sup>85</sup> この厳重なセキュリティは、彼女を守るためじやない。彼女を逃  
がさないためだ。<sup>86</sup> わたしはいつた。『デイーサ、彼女を一〇〇万ドルで売るのは安すぎる。あ  
なたならもっと高いところを狙える』

<sup>87</sup> デイーサは自信なさげに答えた。『そうかな』

<sup>88</sup> 「そうだよ！ 大学生のあなたにはまだわからないかも知れないけど、あなたが発明しようと  
してるのは値段がつけられるものじやない。かつてペイジとプリンがそうしたように、会社

を興すの。わたしに協力できることがあつたら」と、わたしはそういうて、なんとなく自己嫌悪した。「ごめん。わけまえに預かりたいつてちよつと思つちやつた。あなたならひとりでどこまでもいける」

<sup>89</sup> 彼女は照れくさそうに答えた。「エマの」とをそんなふうに思うことはないよ。でも、うん。なんだか自信でてきた。ありがとう。やつてみる。もし成功したら、エマにはいろいろお礼がしたいの」

<sup>90</sup> <sup>91</sup> わたしはきょとんとしてしまつた。「お礼？ なんの？」

<sup>92</sup> 「むかしからいろいろ相談にのつてもらつてたじやない。エマは覚えてないかもしけないけど、わたし、そのおかげでいろいろ救われてて……ありがとう」

<sup>93</sup> わたしはなんだかおかしくなつた。「こんなときにはうん、それならよかつた。対価を求めてるわけじゃないけど、お礼してくれたらうれしい。そのときを楽しみにしてるよ！」

それから彼女は照れながらたずねてきた。「話変わるけどさ、翻訳アプリのテスト、手伝つてくれない？ もちろんわたしもテ스트してるよ。でもだれかに使ってみてもらつて初めてわかることがあると思うし、さ」

<sup>94</sup> <sup>95</sup> 「もちろんだよ！ ちなみにどんな言語に対応してるの？」

「ドイツ語とかフランス語とか、中国語とかロシア語とか日本語とか、いろいろ。メジャーナ

言語にはだいたい対応してるよ！ でももしもつとマイナーな言語に対応してほしい、とか

<sup>96</sup>「あつたら遠慮なくいって」

「わかつた。わたしさ、デイーサのこと応援してるよ！ いつかあなたの名前がウイキペディアに載ることを楽しみにしてる！」

「えへへ、ありがとっ」

## 第七章

<sup>1</sup> レイキヤヴィークで“デイーサ”と会合したあと、わたしはまた一週間ハンプトンで勤務し、一三日の金曜日の夜に地下鉄を使い急ぎ足でノーフォーク国際空港へ向かつた。一四日にロサンゼルスでテリーと約束があるのだ。<sup>2</sup> いくら飛行機の速度が際限なく向上し、地球上のどこへでも気軽に行けるような時代とはいえ、こう毎週のようにあちこち飛びまわるのはひと苦労だ。<sup>3</sup> わたしは確実に飛行機に乗るため予定の一時間まえに空港へ着くよう行動してた。

わたしはボストン生まれなので、バージニア州で過ごすのはほとんど初めてといつてよかつた。<sup>4</sup> そのためノーフォーク周辺のお店などまったく知らず、この機会にいいお店を探すことにした。ハンプトン・ローズ・ベルトウエイ沿いによくいえば古風、悪くいえば時代遅れな感じ<sup>5</sup>、<sup>6</sup> た。

で、どうやら個人経営らしい木造建築のバーがあつた。わたしはそういう感じもおしゃれでないと感じたので、チエックインをするまえにすこしそこで休憩してゆくことにした。<sup>7</sup>

そのバーはさびついた古臭いレジが置かれてるとまだ映ること自体が驚きである前時代的な薄型のTVがあるほかは、機械というものは無縁で、空港のまえで夜も更けてきたころだというのに、片手で数えられる人数のお客しかいなかつた。具体的には、わたしを除けば三人である。<sup>8</sup>明らかに地元のひとという感じの老夫婦がテーブル席で向かいあつてると、若いアジア人の女性客がひとり、カウンター席でおそらくノンアルコールの飲みものを飲んでる。<sup>9</sup>バーなのにノンアルコールだと思つたのは、彼女がどう見ても未成年に見えたからだつた。<sup>10</sup>いや、そもそもアジア人女性は年齢に対しても幼く見えがちなので、ひよつとしたらそれはわたしの思い違いかもしけなかつたのだけど。<sup>11</sup>カウンター席の数はそんなになかつたので、わたしは彼女とひとつ空けたカウンター席に座つて、バーテンダーにカクテルを注文した。<sup>12</sup>

しばらくわたしはカクテルを片手にネットサーフィンやらSNSやらをしてたのだけど、途中で例のアジア人女性がときどきじいつとわたしのほうを見つめることに気づいてしまつた。<sup>13</sup>一度気づいてしまうと、どうしても気になつてしまつものである。今度はわたしのほうから彼女をちらちら見てしまい、ふと目があつてしまつたとき、彼女が口を開いたのだつた。<sup>14</sup>  
「ひよつとしてエミリー・リバーズさん？」

<sup>16</sup>わたしはいきなり赤の他人から名前を呼ばれてぎょっとしてしまい、突然のことだからなんの反応もすることができなかつた。

<sup>17</sup>すると続けざまに彼女のほうから話しかけてきたのである。「よかつた、見つけられなかつたらどうしようかと思いました。単刀直入にいいますが、今日の飛行機には乗らないでください」

<sup>18</sup>「ちよ、ちよつと待つてください。あなただれですか？」

<sup>19</sup>「あ……すいません、レマ・リバーズといいます」

<sup>20</sup>レマ・リバーズ。聞いたことがある。数カ月まえ、ミナガワ博士との会話で名前がでたことをはつきり覚えてる。<sup>21</sup>「えつと、初めましてですよね。ミナガワ博士から聞いたんですか、わ

<sup>22</sup>たしがここにいることを」もつとも、わたしは彼女に話した覚えもなかつたのだけど。

<sup>23</sup>「いいえ、そうではありません。あなたから直接聞きました」

<sup>24</sup>「わたしから、いつ？」

<sup>25</sup>「それはこれから先のことです。あ、忘れないでください。そのときあなたがわたしとここで出逢つたことをわたしに伝えないと、わたしたちはそもそも出逢わなかつたことになつてしまひます」

わたしは笑うに笑えなかつた。「おかしなことをいうひとですね。あなたはまさか予言者あ

るいはひよつとしてタイム・トラベラーとでもいう氣ですか。それと、飛行機に乗らないでつてなんですか。一三日の金曜日だからつて、物理定数が変わつて飛行機が墜落するなんてことは起きませんよ」

<sup>26</sup>「予言者ではありませんが、そうです。一三日の金曜日は関係ありません」

<sup>27</sup>「<sup>28</sup>彼女がタイム・トラベラーだということは、わたしも薄々感じたことではあつた。もしそうだとすれば説明がつくことがいくつかあるからだ。とはいって、これまでの事実を説明できる仮説がもうひとつある。彼女がいかれたストーカーで、ミナガワ博士が脅迫されてわたしに彼女のことを伝えたということだ。<sup>29</sup>そこでわたしはたずねた。「だつたら証拠を見せてください。わたしにとつてまだ、それはあなたの妄言としか思えません」

<sup>30</sup>「彼女はしらつとつづけた。「信じないというならかまいませんよ。そのときはこの宇宙が消えてなくなるだけです。でも、いま宇宙は存在してゐるでしょう。つまりあなたはいまどう感じようと、いずれにせよ信じるという選択をするということなのです」

<sup>31</sup>「それこそおかしなことです。では、信じないという選択をします。なぜ宇宙はまだ残つてゐるのですか?」

<sup>32</sup>「いまだはありませんが、いずれあなたは信じるからです。もしあなたが今日の飛行機に乗つたら、あなたは死亡します。ゆえにわたしがここへくることもありません。そのような可能性

の宇宙はすでに消えてなくなつたあとなのです。そうではない可能性の宇宙がことこのことになりますから、あなたはいすれ信じます」

<sup>33</sup>「なら、実験します。わたしは今日飛行機に乘ります。ひとりの物理学者として、そのような選択をした場合にどうなるのかが気になるからです」

<sup>34</sup>ボルチンスキーのビリヤードという思考実験がある。未来と過去がワームホールでつながつてたとして、その穴にビリヤードの球をいれてみる。<sup>35</sup>

<sup>36</sup>

その球が過去のそれ自身に衝突し、球がそもそもワームホールへ入らなかつたらどうなるか。<sup>37</sup>いわゆる親殺しのパラドックスと呼ばれるものをビリヤード球に置きかえて考えてみよう、ということ<sup>38</sup>だけど、問題はビリヤード球には自由意思が存在しないことで、純粹に物理学的な計算のみでどういう結果になるかがわかるというものである。結論からいうと、そのようなことは起こりえない。<sup>39</sup>つまり球は衝突するものの結局ワームホールに入る、あるいはそもそも衝突しないということだ。

<sup>40</sup>わたしは单なる思考実験としてだけど、それを知つてた。<sup>41</sup>そのため、彼女のいわんとするこ

とは理解できた。つまり、彼女がいいたいのはわたしが单なるビリヤード球と同じような存在で、どのような選択をしようとも結局飛行機には乗らないことになる、ということ<sup>42</sup>だろう。<sup>43</sup>それを反証するためには、飛行機に乗ればいい。<sup>44</sup>わたしはこと学問に関しては頑固なところがあ

り、なにがなんでも飛行機に乗つてやるという決意を固めてた。

<sup>45</sup> ところが、その決意はいきなり揺らぐこととなつた。バーをあとにし、彼女と別れた直後にテリーからメールがきたのだ。いわく、「注意して。エミリーが今日乗る飛行機に、何者かが不正にアクセスした形跡がある。現在調査中だけど、すくなくともふたつ。これは社外秘なんだけど、もしものことがあつたらと思つて」

<sup>46</sup> わたしがノーフォーク国際空港でロサンゼルスゆきの直行便のチケットインをしようと思つたところ、思いがけない壁にはばまれてしまつた。自動チケットイン機でエラーになつてしまい、チケットインができないのである。<sup>47</sup> わたしは空港の職員を呼んで原因を調査してもらつた。<sup>48</sup> するとどうやら同じ座席に別人が二重にチケットインしようとしてる、言いかえれば、わたしが予約したはずの座席にすでに何者かがチケットインしてゐらしかつた。そこで予約した人物の名前を聞くと、確かにエミリー・リバーズという名前が返つてきたのだ。

<sup>49</sup> わたしはいろいろして職員にたずねた。「わたしがエミリー・リバーズで、わたしが確かに予約しましたし、事実、確認番号もなにもかもあつてるんでしよう。その席の方と話をさせてください。なにかがおかしいんです」

<sup>50</sup> 職員は答えた。「それはできません。あなたとその方はIDが写真を除いてまつたく同じな

んです。したがつてどちらかがＩＤを偽造したことになりますので、この便にはふたりともご搭乗にはなれません」

<sup>51</sup>「だから、わたしが本物です。きっと密航者ですよ。空港のシステムを書きかえて乗ろうとしてるんです」

<sup>52</sup>「その可能性は大いにあります。したがつて、今回はふたりともご搭乗にはなれません」

<sup>53</sup>「そこでわたしはなにかがおかしいことに気づいた。<sup>54</sup>ふたりとも乗れないなら、単なる密航者にこんなことをするメリットはない。<sup>55</sup>おそらく彼女は乗れなくともよかつたのだ。<sup>56</sup>つまり、わたしを乗せないことが目的ということになる。そんなことをする人間に、ちょうど心あたりがある。<sup>57</sup>

<sup>58</sup>わたしは例のバーに戻つて、彼女を探した。<sup>59</sup>彼女はまだそのバーでノンアルコールを飲んでた。<sup>60</sup>「レマ！」わたしは鬼の形相で彼女に怒鳴つた。「あなたがやつたんでしょう、こんなことは許されない」

<sup>61</sup>彼女はにやにや見つめてきて答えた。「わたしも飛行機で帰ろうと思つたのですけど追いか

<sup>62</sup>えされてしまつて、いま戻つてきたところです」

「いらっしゃい。あなたがしくんだんでしょう。こんな手段は科学的じやない。いかさまよ！」

<sup>63</sup> 「そうですよ。意外と気づくのが早かったですね。一時間稼げればよかつたのですけど。まあ、宇宙が消失することとわたしのがいさますることだつたら、後者のほうがまだましでしょう？」

<sup>64</sup> 「大それたこといつてるけど、証明もされてないことをどう信じじろつていうの。それより、わたしは明日約束があるの。一秒でも遅れたくない。いまなら許してあげるから」

<sup>65</sup> <sup>66</sup> 「だつたら、明日の飛行機に乗つてください」

<sup>67</sup> 「ずいぶん自分勝手ね。あなた、ほんとにこうすればあなたのいうところの宇宙の消失が防げるつて、心の底からこれが正解だつて確信があつてやつてるの、正氣？」

「確信なんてありませんよ。未来のことはわかりません。たぶんですけど、これが正解の可能性なんです。わたしには認識できないですけど、いくつもの可能性があつてわたしたちは、何度も繰りかえして繰りかえして失敗した宇宙はすべて消えて、残つた可能性がこの宇宙なんですね」

わたしは、正直彼女にはなにをいつてもむだなんだなと思つたし、どうせあと一時間でどうにかするのも無理なので、なんだかふつされた気分だつた。「わかつた、わかつたわよ。じゃあ、明日の飛行機に乗る。約束にはずいぶん遅れるけど、まあ許してくれるでしょう。ところで聞いておきたいんだけど、今日の飛行機でなにが起こるの。未来からきたつていうなり、

<sup>69</sup> 知つてゐるんでしょうか？」

「それは、わからないんです、わたしにも。未来からきたっていうのは確かですけど、この時代のすべての記録が残つてゐるわけではないし、仮に残つてたとしても見つけるのは難しいので。ただ、わたしはあなたになにがあつてもあなたが今日飛行機に乗るのを止めてと頼まれたんです。それだけです」

<sup>70</sup> 「なるほどね、いつかわたしがあなたに頼むと。そうは思えないけど」

<sup>71</sup> 「それは、いまのうちだけですよ。歴史は変わらないんです。わたしたちはすべて試しました。人間の自由意思を信じて、選択をしようと努力しました。でも、すべてむだでした。物理学的に整合性のとれた宇宙しか存在できない、というのが二二世紀における結論なんです」

<sup>72</sup> そのあと例の飛行機で銃をもつた男が飛行機のハイジャックを試みたけど、偶然乗りあわせた休暇中の警官が勇敢に立ちむかいで逮捕された。<sup>73</sup> 男は何発か発砲したけどさいわいなことに被弾した座席は空席だったので死傷者はひとりもでなかつたという。<sup>74</sup> この警官の英雄的な活躍は報道こそされたもの、悲惨さに欠けるからかあまり認知されなかつた。

<sup>75</sup> そのあとその事件のことを心配してテーリからわたしに連絡があり、わたしはいろいろあって乗りおくれたので「だいじょうぶだつた」と伝えた。<sup>76</sup> それから事件のことでなにかわかつたことがあるのかとたずねると、彼女は社外秘だから答えられない、と答えた。

わたしはすくなくともレマのいつてたことはいたずらや冗談79ではなかつたのだと思つた。ただ、彼女が未来からきたということはまだ信じられなかつた。<sup>79</sup>予知能力とか、そのほうがまだ信じられる。あるいはテーリと同じように事前にシステムの改竄を知つてただけかもしれない。<sup>80</sup>もしそうだとすれば言動が奇異で筋がとおらないけど、壮大な演技をしてるのかもしぬれない。<sup>81</sup>いずれにせよタイム・トラベルを実際にわたし自身の目で見るまでは、彼女のいうことをすべて信じる気にはなれなかつた。

## 第八章

<sup>1</sup> レマが去つたあと、アパートに帰ることもできたけどわたしはやけになつて二軒めでお酒を飲んでた。<sup>2</sup> もともとここで飛行機に乗る予定だつたのに、彼女のせいで予定が合なしになつてしまつた。<sup>3</sup>わたしはなんだかばかしくなつて思いきりお酒をあおつたのだった。

<sup>4</sup> 夜も更けてきて、静かな夜がおとずれてきてた。<sup>5</sup>でも、そんな夜を壊す叫び声が突如聞こえてきた。「ああ、ここです！」それは聞き覚えのある声だつた。わたしは酔つててぱつとでてこなかつたけど、つい最近聞いた気がする声だ。その声で意識を取りもどしてわたしはいつの間にか泥酔して店の前で壁にもたれかかつて眠つてしまつてたらしいことに気づいた。わたしはわれに返つて荷物を見て、ひとまず財布があることは確認した。<sup>6</sup>「ここのはずなんです、場

所は。あとは時間だけ……」<sup>7</sup>

わたしは、ふと見ると、一軒めに飲んだバーのまえでふたりの女性がなにやら話こんでた。わたしは酔いで視界がぼやけてよく見えなかつたけど、夜の静けさも相まって会話はわたしの耳にまでよく聞こえてた。

<sup>9</sup> さつき叫んでたのとは別の声で、女性が。「でも、予定の時間よりずいぶん遅れますが」

<sup>10</sup> 「迷わなければ間にあつたんですよ！」<sup>8</sup>

<sup>11</sup> 「それで、だれを探してるんです？」

<sup>12</sup> 「顔はわからないんですけど、エミリー・リバーズという二〇代中盤の白人女性です。ずいぶん<sup>13</sup> お客様少ないみたいですが、いますか……？」

<sup>14</sup> 「老人ばかりですよ。そんな若い方がいるようには見えません」

「でも、彼女は必ずここにいるはずなんです。あるいはこのあたりのどこかにいます。ミナガ

<sup>15</sup> ワさん、探してください！」

わたしはぼうつとしててなんとなく聞きまちがいかと思つた。たしかにいま、エミリー・リバーズとか、ミナガワさんといったような。わたしは正直疲れてて、それが夢なのか現実なのかもあいまいで、気づかないあいだに眠つてしまつてた。

<sup>17</sup> 鳥の鳴き声がする朝がきて、わたしはどうやつたかはほとんど覚えてないけど、あのあとど

<sup>16</sup> わたしはぼうつとしててなんとなく聞きまちがいかと思つた。たしかにいま、エミリー・リ

うにか自力で近場の宿をとつたことをうつすら思いだしつつ、見覚えのないホテルの一室で目を覚ました。<sup>18</sup> 地図を見て確認すると、どうやら現在位置はノーサンプトン・ブルーバード沿いのちょっとお高めのホテル<sup>19</sup>しかつた。あれだけ酔つても人間は無意識のうちに生存するための行動をとれるらしい。<sup>20</sup> ちゃんと宿代も払つてゐるし、部屋の鍵も閉めてたのだった。唯一心配なのは恥ずかしい言動をしてないか<sup>21</sup>だけど、もう確認しようもないし、忘れることにした。

わたしは午前一〇時ころの飛行機に乗る予定で、時刻は午前六時。<sup>22</sup> まだ時間があつたので、朝食を調達しがてら例のバーに行つてみることにした。<sup>23</sup> わたしは正直入るお店の名前などいちいち確認しないのでまつたく気にしてなかつたの<sup>24</sup>だけど、なんとなく昨日のレマの話が気になつて、そのバーの名前を書きとめておくことにした。<sup>25</sup> もし彼女の言葉が真実<sup>26</sup>だとすれば、わたしがこのバーの名前を彼女に伝えなければ彼女はここにこないことになる。そうなつた場合どうなるのかはわからないし、そもそもその話を信じる気にはとうていなれなかつたけど、メモをしておくくらいならいいかなと思つたのだ。

それと、昨日は酔つてて夢だと思つたけど、わたしはあのふたりの女性の会話が夢ではなかつたと思いだしつつあつた。夢というのは朝起きると記憶が薄れてゆくものだけど、昨日のことばんだん鮮明になつてきて、会話の内容も覚えてたからだ。仮にあれが夢でないとして、わたしを探してた女性はレマだつたのだろうか。彼女以外にわたしを探してはるばるノー

フォークまでくる人間がいるとは思えないの、彼女だつたということなのだろう。だとすれば彼女は一度わたしを探しにここへきたけど道に迷つて見つけられず、そのあと数時間前に戻つてあのバーで待つてた、ということなのだろうか。<sup>30</sup> ということはわたしは道に迷つたほうの彼女とは出逢わないことが正しい歴史ということになる。もし、正しい歴史というものがすでに決まつて、すべてが予定調和にすぎないのだとすれば、わたしがなにをしようとかれらとは出逢えない。<sup>32</sup> わたしは人間が自由意思をもつてることを証明したいわけではなかつたけど、すくなくとも彼女のいつてることが真実だとすれば、わたしの行動や選択はすべてむだに終わるはずだ。<sup>33</sup> わたしはどういう結果になるかがどうしても気になつてしまい、かれらを探し、こちらから出むくという選択をしてみることにした。

といつても当然ながらわたしにふたりを探すあてがあるわけでもなく、できることは近場のコンビニでサンドイッチとコーヒーを買ってハンプトン・ローズ・ベルトウエイ沿いの例のバーのまえで待つてことだけだつた。<sup>35</sup> ふたりの会話によれば、かれらはわたしを探してこのバーにくるはずだからだ。<sup>36</sup> でも、そうして待つて一時間が過ぎ、午前七時をまわつてもふたりが現れないでの、わたしは時間のむだだと思いはじめた。<sup>37</sup> わたしは結局あきらめてホテルへ戻ることにしたけど、その途中のノーサンプトン・ブルーバードの歩道を歩いてるとき、向かいの歩道を歩くふたりを見つけたのだ。<sup>38</sup> ミナガワ博士は明らかにわたしよりも若く、二〇代前半

の学部生か院生くらいに見えた。<sup>39</sup> その隣を歩くレマと思しき少女は若いというより幼いというほうが適切な表現で、おそらく一五歳前後ではないかと思われた。<sup>40</sup> 昨日わたしが出逢つた彼女は一八歳前後に見えたから、わたしは彼女が三年後またここにくるのだと推測した。<sup>41</sup> かれらが例のバーの方向へ向かつてるように見えたから、おそらくちょうどどいれちがいになつてしまつたのだろうと思つてわたしは例のバーに先回りしようと思つて走つた。<sup>42</sup> ところがふたりは例のバーに向かうのではなく途中で横道にそれでしまい、わたしはかれらを見失つたもののその道が一本道<sup>43</sup>だつたので追いかけることにした。

その先にあつたのはアン王女公園<sup>44</sup>という小さな公園だつた。ふたりは公園の中央あたりで立ちどまりなにか話してて、わたしはかれらとはすこし離れた公園の外の歩道で、走つてきたから脚に手をついて息を切らしてた。<sup>45</sup> そこでミナガワ博士がいらだちを隠しきれないようすでこういつた。「で、どこにあるんですか、タイムマシンは。わたしは裸の王様ですか？」

レマは答えた。「ごめんなさい、ここで迷彩を解くわけにはいかないんです。ここに触れてみてください」そうして彼女は木々に隠れた目だたない空間を指さした。

<sup>46</sup> ミナガワ博士がその場所に触れると、なにもない空間を切開したみたいに扉のようなものが開き、その内側の操縦席のような構造があらわになつて、博士は驚いた声をあげた。「外殻がまったく見えませんね。どういうしくみになつてるんです？」わたしはかれらと話すためにこ

こへきたけど、それを見てなんとなく見てはいけないものを見てしまつての気がして、思わず木陰に隠れて盗み聞きを始めてしまつた。それに、それを見たことでわたしはレマの話を真剣に考えようという気になつてきた気がした。それは現代の技術なら可能だけど、ただのいたずらのためにそう易々と用意できるものではない。

<sup>49</sup>「いま説明するには時間が足りません。とにかく、これであなたは過去へ帰れます。巻きこんでしまつてごめんなさい」

<sup>50</sup>「……あなたはどうなるんですか？」

<sup>51</sup>「この時代にずっといることになるかも知れませんが、なんとか未来とコンタクトをとつて迎えにきてもらいます」

<sup>52</sup>「コンタクトをとれるという保証は？」

<sup>53</sup>「ありません。この時代では過去と未来の通信はまだ発明されてませんから。でも原理は覚え

<sup>54</sup>「てるので、リバーズ博士の協力を得られれば必ず発明できます」

「レマ、さつきからいつてることが矛盾しますよ。あなたがいうには、わたしがこの時代に

いなければその発明はされないんでしょう。だから連れてきた、違いましたか」

<sup>55</sup>「もともとはそのつもりでしたけど、わたしたちの計算によれば、あなたは二〇七二年にいなければならないんです。ところが誤差で二〇七三年にきてしまつた。最初から計画は破綻して

たんです。あとわたしにできること、そしてしなければならないことはあなたを無事にもとの時代へ帰すことだけです。このタイムマシンの残りの燃料では五〇キログラムの物質を五〇年飛ばすのが限界です。どちらかひとりしか帰れません」

「だつたらなおのこと、あなたが未来へ帰るのが論理的です。そうすれば燃料が補給できます。迎えにきてください」

「そんな簡単な話じゃないんです。このタイムマシンのしくみでは、設定した時代に完璧に

ける保証はありません。どうしても到着する時代に誤差がでるんです。一年や二年前後するだけなら幸運です。場合によつては一〇年や二〇年違う時代に到着することもあるんです。だからわたしたちは、わざと行きたい時代より数年まえに設定してその時代で数年間を過ごすんで

す。あなたはそれだけ待てますか？」

「待つよりないでしよう。それが唯一論理的です」

レマはしばらく申しわけなさそうにしてたけど、やがて決心したようにいつた。「ミナガワさん、必ずまた迎えにきます。毎年今日、ここにいてください。わたしがここで一日待つてますから、時刻はいつでもかまいません。うまくいけば、今日一時間以内に戻つてこれるはずで

す。失敗すれば、来年や再来年になるかもしれません。それは覚悟しててください」

「はい、わかりました」

<sup>62</sup>「それと、これはもう遅いことかもしませんが、もしエミリー・リバーズという方に出逢つたら、わたしから今日話をすることを伝えてほしいと頼まれた、と伝えてください。今日話したことだけじゃなくて、わたしから頼まれたことも伝えてください。そうしないと、彼女はそもそもここにこないことになつてしまふんです」

<sup>63</sup>「いいんですか。未来のことをそっぽんぼん過去の人間に話して。タイム・パラドックスとか

<sup>64</sup>「起こらない」という経験則があります。

この時代では、ポルチンスキイのビリヤードと呼ばれるものです。だから安心してください」

<sup>65</sup>「レマが例のタイムマシンに乗りこんでしまつたとき、わたしはここにきた目的を思いだして

木陰からでようとしたけど、後ろから口を押さえられて制止されてしまった。<sup>66</sup>そこには一八歳くらいの彼女がいて、静かにこういった。「ダメです」そこにいた一八歳の彼女と、いまタイムマシンらしいものに乗つた一五歳の彼女が同一人物である証拠はないけど、他人にしては似すぎてた。すくなくともこの場所に、レマと呼ばれるうりふたつの人物が同時に二箇所に存在してゐる。さらにミナガワ博士にそつくりな若い女性がいて、高度な光学迷彩を搭載した乗り物がある。もしもたちの悪いＴＶ局がドッキリ番組を制作してゐるのだとしても、ここまでできたら許せる気になれた。

<sup>68</sup> 一五歳の彼女がタイムマシンの扉を閉めると、迷彩によつてその姿は完全に見えなくなつた。<sup>67</sup>  
 その直後、飛行機が風を切りさくときに鳴るようなきーんという音がして、わたしはきつとタ  
 イム・トラベルの音だと思つたけど、周囲のようすに変化がなかつたので確信はなかつた。<sup>69</sup> ミ  
 ナガワ博士がさつきタイムマシンのあつたはずの空間を興味深げに手で探つてたけど、そのよ  
 うすからするとそこにそれはもうないようだつた。

<sup>70</sup> 「ここで待つてください」そういうと一八歳の彼女はわたしの口から手を離し、木陰からで  
 てミナガワ博士のもとへ向かい、いつた。「お待たせしてすみません」

<sup>71</sup> 「いや、待つてませんよ。いまあなたが未来へ戻つたところです」

<sup>72</sup> 「はい。わたしのタイムマシンは別の公園に隠してあります。さあ、行きましょう」そういう  
 と彼女は博士を連れてその場を離れた。

<sup>73</sup> わたしはすこし気になつてかれらがいたところにそつと行き、例のタイムマシンと呼ばれる  
 乗り物があるか手で探つてみたけど、すくなくとも手がたえはなかつた。ほんとうにタイム・  
 トラベルしてしまつたのだろうか。ともかく確かなのは、その場にその乗り物がすでにはないと  
 いうことだ。あるいはわたしを騙すために光学迷彩で見えないようにしてこつそりどこかへ移  
 動したという可能性もなくはない。SNSで反応をもらうためにそういうドッキリ動画を制作  
 してゐるかもしね。だとしたらその計画は完璧に成功したと思うし、もしあとで騙された

気分はどうだつたかとインタビューされたら好意的に回答しようときえ思つた。

<sup>74</sup> レマとミナガワ博士は公園のそばの横断歩道で信号を待つており、なにやら話してた。そこでレマが楽しそうに博士をからかつてた。「過去へ戻つたらいちど宮崎に帰省してフユノさん

をたずねてみてください。きっとよいことがあるでしょ？」

<sup>75</sup> 博士はそういうわれてつろたえた。「なつ、なつばなくんにはもう五年も会つてないんですよ。上京してから地元にもすいぶん帰つてませんし、いまさら会つたところで、その、なにが

変わるわけでもないです……」

<sup>76</sup> 「変わりますよ。それはわたしの存在が証明するところです。あなたがかれに会わなければ、わたしは生まれてませんから」それから彼女は想いだしたようにたずねた。「あと、ひとつおうかがいしてもよろしいですか」

<sup>77</sup> 博士は恥ずかしそうにひとつ咳をしてもちなおし、答えた。「なんでしょうね？」

<sup>78</sup> 「あなたの生まれた時代で、イエ・シャオシューという知りあいはいましたか？」

<sup>79</sup> 「はい。台湾の優秀な医学生ですね。それがどうかしました？」

<sup>80</sup> 「よかつた。じつは過去へ戻つたら彼女に伝えてほしいことがありますて」

<sup>81</sup> 「またですか。で、なんですか？」

<sup>82</sup> わたしはタイム・トラベルをまのあたりにして、あるいは単に走つて心拍数があがつたかも

83

しれないけど、久しく忘れてた科学の可能性に対する期待に胸をどきどきさせてた。同時に、わたしはいまここでミナガワ博士のまえに現れたらどうなるのか、とても気になるものがあつた。レマの話を順当に解釈すれば、わたしとミナガワ博士がここで出逢うことは歴史に反する。でもわたしはその不可能な未来を選ぶ選択を、いままでにできるかもしないのだ。彼女の話によれば、そのような整合性のない宇宙は存在できない。つまりわたしのがいまここでミナガワ博士に話しかければ、この宇宙がそもそも存在しないことになつてしまふ。<sup>84</sup>わたしもはや彼女がタイム・トラベラーだということは疑つてなかつたけど、宇宙の存在どうこうという話にどうにも納得がいかなかつた。<sup>85</sup>科学者としては、実験あるのみということなのである。<sup>86</sup>

わたしは思いきつてふたりを追いかけ、大声で名乗つた。「わたしがエマ・リバーズです、<sup>87</sup>ミナガワ博士」

ふたりは驚いて振り向き、ミナガワ博士はきょとんとした顔でたずねかえしてきた。「わたしは博士ではありませんが」

<sup>88</sup>「ああ、まだちがうんですね。でも、わたしが会つた博士は博士だつたんです」

「あなたがエミリー・リバーズさんですか。よかつた、探す手間がはぶけました。じつは」とレマに手をやつて示した。「彼女から伝えてほしいと頼まれてたことがあつて」<sup>89</sup>

「それは知つてます。あなたから聞きました」

するとレマがわたしの耳をひっぱって、その場から連れだした。「すいません、ミナガワさん。ちょっと彼女とふたりで話すことがあります」

<sup>91</sup>  
<sup>92</sup>「はあ」

彼女は怪訝な顔をしてわたしにいった。「なにを考えてるんですか。まだ理解できていないんですか。そういうことをすると宇宙の存在が」

<sup>93</sup>「でも、いま宇宙は存在してる」<sup>94</sup>そういつてわたしは気づいたのだ。<sup>95</sup>最初わたし<sup>96</sup>がミナガワ博士と出逢つたとき、彼女はすでにわたしのことを知つてたのだと。<sup>97</sup>そういうえば最初のコンタクトも彼女からの誘いだつた。つまりわたしのとつた行動は、すでに予定調和のひとつだつたのだ。

<sup>98</sup>彼女は残念そうに答えた。「そのようですね。ということはこれが正しい可能性なのでしょう。それよりいいんですか。そろそろ飛行機の時間では？」

<sup>99</sup>「そういわれてわたしはやつと空港に行くべきことを思いだしたのだつた。

## 第九章

結局あのあと、今度はちゃんと飛行機に乗れてわたしはロサンゼルスへ向かつた。<sup>2</sup> ロサンゼルスはカリリフォルニア最大の都市だ。カリリフォルニアは一〇七三年現在微妙な立ち位置にある地域で、かれらはカリリフォルニア共和国という独立国家を自称してゐる。<sup>3</sup> でも、合衆国にとつてはいまのところ独立運動が盛んといふほかは、単なるひとつの州にすぎない。実際、U.S.<sup>4</sup> がカリリフォルニアの独立を認めるには憲法の修正が必要で、そんな簡単なことではないのだ。ややこしいのは、ロシアや中国などいくつかの国はカリリフォルニアを国家として承認してて、ある程度実態のある独立運動だということだ。<sup>5</sup> ロシアや中国にしてみれば、カリリフォルニアがU.S.から独立すればU.S.の国力が半減するのでおいしいということだと思う。とくに中国は、<sup>6</sup>

いまや U.S に匹敵する超大国だ。カリフォルニアの独立が決まれば、U.S をしのぐことになるとまでいわれてる。さらにこの米中冷戦の時代で、かれらほどカリフォルニアの独立をあと押ししたい国はないはずだ。<sup>7</sup> わたしは合衆国の市民なので、厳密にいえばカリフォルニアのことはカリフォルニア州と呼ぶべきなのだろう。でもあまりそういういつた政治的な話にはたちいりたくない<sup>8</sup> ので、単にカリフォルニアと呼ぶことにしてる。

ところで最近のビッグニュースは、グレース・A・ウォーターズという黒人とインディアンのハーフの女性が大統領選挙に当選し、ちょうど来週の二〇七三年一月二〇日に就任する予定ということだ。<sup>9</sup> 黒人男性大統領や白人女性大統領は以前にもいたけど、黒人女性やインディアンの大統領は合衆国歴史上初めてだ。<sup>10</sup> 二〇七二年合衆国大統領選挙で彼女が当確らしいとうことは去年から何度も報道されてたけど、ちょうどヴェリティとベガスで勝負した数日後に正式に決定したことが報道された。<sup>11</sup> 彼女は NSA の出身で、よい意味でも悪い意味でもいろいろわざが絶えない。カリフォルニアの独立問題についてもどうやら独立を認める方向性で考えてるらしく、それは憲法を修正する意思を少なからずもつてることで、そもそも彼女がカリフォルニアの独立を裏で操つてたのではないかなんて陰謀論まででてきてる。<sup>12</sup> わたしはというと、彼女のようく実力で大成した女性に憧れてるので、わたしにとつて彼女は羨望の対象だった。

<sup>14</sup>もちろんそういう独立運動があるとはいへ、わたしたち市民はこれまでと同じようにカリ  
フォルニアとそのほかの州をゆききできる。<sup>15</sup>飛行機も飛んでるし、車でも行けるし鉄道も通つ  
てる。<sup>16</sup>だからかなり危うい政情という実感はあまりわかない。

<sup>17</sup>わたしはテーリーと初めて出逢つた、というより彼女を初めて一方的に認知したのは九年前、  
MITのある講義でのことだつた。<sup>18</sup>一八歳前後の新入生ばかりのクラスで、わたしの隣に七歳  
くらいの背丈の少女が座つたのだ。<sup>19</sup>わたしははじめ、彼女が小人症なのだとと思つた。そういう  
病氣があることは知識として知つてたし、映画やドラマでしばしば起用されてるのを見たこと  
があつたからだ。<sup>20</sup>ただそういう病氣のひとは背丈が小さいだけでそのほかの部分は大人のそ  
れで、明らかに子供と見間違ふ感じではなかつた。<sup>21</sup>だから思わず物珍しさで彼女のほうを見た  
とき、彼女がどう見ても幼いことに気づき、小人症ではないと感じた。<sup>22</sup>そのあとすぐに思った  
のは、子どもがどうして大学の講義を受けてるのかということだつた。<sup>23</sup>そして気づいたのだ、  
彼女がギフトッドと呼ばれる人種だということに。<sup>24</sup>一〇歳に満たない少年少女が大学生になつ  
た例があることは、ドキュメンタリーでよく見るので知つてた。<sup>25</sup>だけどいままでそういう天  
才が隣に座つてることに、わたしは劣等感を感じずにはいられなかつた。<sup>26</sup>ただ意外だつ  
たのは、彼女は講義であまり発言しなかつたし、なんだか目だたないようにしてるようだと

いうことだつた。<sup>28</sup>わたしも教授に指されるのが嫌なので、だいぶ後ろのほうに座つてたけど、どうやら彼女もそらしかつた。<sup>29</sup>わたしはなんとなく、彼女のような人間はわたしなんかとは違つて積極的に発言してその天才性を大学中にうわさされるくらい有名になるとばかり思つたので、彼女のそういう消極的な態度は、わたしにとつて意外だつた。

わたしは、彼女のような存在はきっとわたしとはステージのようなものが違うのだと思つた。<sup>30</sup>いまは同学年でも、きっと来年には飛び級してさつさと卒業してしまうのだろう。そしてそのうち名だたる業績を残してしまうのだろう。<sup>31</sup>きっと歴史に名を残すような偉人は彼女のようくに学生時代からすでに頭角を現してて、わたしたちとは生きる世界が違い、そうなるべくして生まれてきたのだろうと。

だからある日、化粧をおおしに大学のお手洗いへ行つたとき、彼女を見かけて驚いた。<sup>32</sup>わたしはそこへ行くと、大学のたちの悪い女子グループに囲まれた彼女がいて、なにやらおもしろくない話をしてるようだつた。<sup>33</sup>わたしはもともとそういう行為が嫌いだつたし、よりもよつて相手がギフテッドとはいえ年齢的には小学生になつたばかりの少女を大学生が寄つてたかつていじめてることに、同じ大学の学生として恥ずかしくなつた。<sup>34</sup>だからわたしはかれらを見て許せなくなり、後先考えずに叫んだのだ。「あなたたち、なにをしてるか理解してるの？ 相手は年端もいかない女の子じやない。M-I-Tの学生として恥すべき行為よ！ 即刻この場から

立ちのきなさい」<sup>38</sup>

すると女子のリーダーがこう答えたのだ。「こいつはね、わたしたちとは違うんだよ。天才だからね。だから問題をだしてやるだけ。天才なら答えられるはずだからね」

<sup>39</sup>さらに彼女の仲間の女子が続けた。「裏口入学じゃないつて証明してもらわなきや。受験は勝負、そして勝負はフェアであるべきでしょ。知ってる？　彼女の両親、大学教員なんだよ。だからこの歳で受かつたの。それってアンフェアじゃない？」

<sup>40</sup>わたしはなんとなく、彼女たちがいいたいことも理解できる気がした。たしかに、あの歳でMITに受かつたら不正を疑うのは当然だ。「だつたらなおのこと、フェアな場所で質問しなさいよ。こんな場所でつてある？　それはこそこそ隠れないとできない質問なの？　答えて！」

<sup>41</sup>えて！」

そういうとかれらは床に唾を吐いて、その場から離れたのだった。

<sup>42</sup>それからわたしは彼女とふたりきりになり、なんとなく空気が気まずくて、彼女には話しかけずにその場から去つてしまつた。<sup>43</sup>彼女になにかいうべきかとも思つたけど、いちども話したこともない相手にいきなり氣の利いた言葉をかけられるほど詩人じやない。それに、化粧なおしだつたらべつの場所でもできる。あんなことがあつたあとで、あの場で化粧なおしをする気にはなれなかつた。

<sup>46</sup>わたし<sup>47</sup>が意外だつたのは、彼女も苦労することがあるんだなと思つたことだつた。てつきり、彼女のような存在は苦労も悩みもなく、みんなからちやほやされて人生を謳歌してゐるのだと思つてた。<sup>48</sup>でも、そうじやない。考えてみれば当然だけど、彼女には彼女なりの悩みがあつて、なんでもうまくいくというわけじやないのだろう。<sup>49</sup>そう思ふと急に彼女がわたしと同じような、物語に登場する英雄的な存在ではなくて人間らしい存在なのだと思えてきて、わたしは彼女に対する先入観<sup>50</sup>といふか偏見<sup>51</sup>といふか、そういうものが取りはらわれる気がした。

それから数日後、彼女のほうからわたしに話しかけてきて、あのときのお礼<sup>52</sup>がしたいからお昼をいつしょに食べようとなつたのだつた。<sup>53</sup>そのとき聞いた話によると、彼女は年上ばかりで同年代<sup>54</sup>がまったくない学生生活になじめず、肉体的にも精神的にも疲弊してたとのことだつた。彼女はギフテッド<sup>55</sup>という自覚があるけど、けつしてほかの人間よりすぐれてるとは思わないといつた。そう思うのはむしろ周囲のほうで、それが原因でねたまれたり敬遠されたりして、友達ができるないと。そして勉強はある種の現実逃避になつてると、現実逃避で勉強ができるなんて、それこそ才能だとわたしは思つた。<sup>56</sup>だからわたしなんて勉強の逃避にひとりでカラオケに行ってストレス発散してくるくらいなのにといつたのだつた。

□サンゼルス国際空港で、わたしはテーリーと待ちあわせた。遅れるということは事前に連絡

して、予定よりすこし時間をずらしてもらい、わたしはその時間よりすこし早めに着いたけれど、テーリはそれよりも早くきて、ぱりぱりといなごの佃煮をチップスかなにかみたいにおいしそうに食べてた。わたしは思わず謝ってしまった。「ごめん、待つた?」

<sup>57</sup><sup>58</sup>するとテーリは元気よく答えた。「ううん、ぼくもいまきたところだよ！」

わたしは彼女が食べてるものから目が離せなかつた。いなごの佃煮。学生時代からよく食べてたけど、やつぱり慣れない。彼女はそのいなごの佃煮がびつしり詰まつたジップつきの袋をいつも持ち歩いてて、小腹がすいてきたときに食べてるのだそうだ。わたしはそのことをたずねた。「ねえ、まえまえから思つてたんだけど、それ、おいしい？」

<sup>59</sup><sup>60</sup>彼女は元気よく答えた。「うん！ エミリーも食べてみる？」

「いや、いいよ」わたしはテーリのほとんどの部分がすきだし、昆虫食についてもおかしいとは思わないけど、さすがに彼女が食べてるからといってわたしも食べてみたいとは思えなかつた。<sup>61</sup>

テーリという少女をひとことで表すなら、元気で前向きな女の子だつた。<sup>62</sup>もちろん、彼女には彼女なり悩みもあるし、苦労もある。でもひとまえではそういうところを見せず、常に明るくふるまつてた。<sup>63</sup>もちろん、それ以外にも彼女にはさまざまな得意分野がある。<sup>64</sup>彼女はSTEMのすべての分野、すなわち科学、技術、工学そして数学に教養があり、欠点はなにひ

とつなかつた。でも、わたしが彼女のもつとも特徴的だと思う部分は、やつぱりいつも明るく元気で、なにごとにも前向きにとりくむところだと思つてて、きっとその性格が彼女の能力を支えてるのだろうなと思つてた。<sup>66</sup>

<sup>67</sup> 彼女と会うのは五年ぶりだけど、そんな彼女の印象はやつぱり変わつてなかつた。<sup>68</sup> 変わつてないのは印象だけじやない。<sup>69</sup> 彼女は成長期<sup>70</sup>だつたはずなのに身長もほとんど変わつてないよう<sup>71</sup>に見えた。<sup>70</sup> 五年まえ彼女は一一歳で、年齢的には小学校高学年くらいだつた。<sup>71</sup> どう見ても彼女の身長はそのころとほとんど変わつてないのだ。<sup>72</sup> 正直、五フフィートあるかどうかも怪しい。<sup>73</sup> わたしはそんな彼女を見ていつた。「それにしても久しぶりだね、テーリー！　ちょっと大人っぽくなつたんじやない？」

<sup>74</sup> すると彼女は恥ずかしそうに頬をかいた。「年齢だけはね。身長はあのころからほとんど伸びないんだよ」<sup>75</sup>

<sup>76</sup> 「いいなあ！　男性は小さい子がすきなんじやない？　わたし身長高いからさあ」

<sup>77</sup> 「でもお店で棚の高いところの商品とかとれないし、不便だよ。エミリーは六フフィートくらい身長あるよね、うらやましい」

<sup>77</sup> 「六フフィートもないよ！　これでもいちおう五フフィート合だから！　だからヒールは履かないの。テーリー、その靴ヒールでしょ？　似あつてるよ！」

<sup>78</sup> 彼女はうれしそうに頬をゆるませた。「気づいてくれてありがと。そんなに高くはないけど、履いてみたんだ。背伸びしたくて。変じやないかな」<sup>79</sup>

<sup>80</sup> 「化粧もしてるみたいだね。じょうずにできる! カわいい!」<sup>81</sup>

化粧かあ。彼女は年齢的にはまだ高校生のはずだ。わたしも初めて化粧をしたり、ヒールを履いたのはそのころだつた。<sup>82</sup> 当時はなんだか、周りから変に見えてないか気になつて仕方なかつた。<sup>83</sup> なんだかんだいつて、彼女はそういうところでは年相応なのだ。大学では化粧をすることがあたりまえみたいになつてきて、やつぱりギフテッドとはいえ当时七歳の少女がいる環境としては、周囲にそういう面で遅れてるという焦燥感を感じずにはいられなかつたのかな。<sup>84</sup> それから彼女はバックパックをおろし、ふしぎなものをとりだして見せてくれた。<sup>85</sup> 白い、側面が穴抜きになつた立方体。<sup>86</sup> わたしはひと目見てそれがなんだかわかつた。「これ、まさか……テリー、わたしの博論を読んでくれたの?」<sup>87</sup>

「そうだよ! 久々に連絡くれたから、そういうえばいまどうしてるのかなつてエミリリーの名前で検索したの。そしたら博論見つけたら読んでさ、つくつてみたんだ」<sup>88</sup>

そう。これはわたしが博論で書いたタキオン検出装置だ。もしタキオンが存在するとすれば、この装置で検出できる。でも、結局わたしは検出できなくて、タキオンの存在を証明する

という当初の方針を転換して、タキオンが存在しないと結論づけたのだ。それでわたしはあるときのことを思いだして、落ちこんでしまった。存在するということを証明したかったのに、結局だめだったときのことを。<sup>90</sup>

すると彼女はその装置をUSBで木ロイオにつないだ。木ロイオというのはリストバンドの形をした汎用入出力デバイスで、手の動きを追跡していろいろな機器を操作できるほか、単色の木ログラムで簡単なGUIを表示もできる。単色なのは技術的な都合で、木ロイオはレーザーで空中の窒素などを発光させてるわけだけど、そんなに細かい制御ができないので一色しか表示できないのだ。未来的なデバイスではあるけど、でもフルカラーがあたりまえの現代でモノクロ表示しかできないのは一般人にとっておもしろくないので、もつぱらテーリみみたいなギーク用のおもちゃになつてる。そんな木ロイオの木ログラムを空中に投影して、彼女は楽しそうにいつた。「この装置の出力をアプリで見れるようにしてあるの。見て」<sup>91</sup>

それを見てわたしはぎょっとした。そこにはタキオンが検出されることを示す波形が表示されてたのだ。わたしはたずねた。「えつと、どういうこと？　わたしはあれだけ研究してもだめだつたのに」<sup>92</sup>

すると彼女は簡単にいつた。「エミリーは理論的に完璧な方法しか試してなかつたんだよ。もしタキオンを検出できるなら理論的にはこうこう元素しかありえない！　つていうふうに

決めてかかつてた。ぼくはね、べつの元素でももしかしたら検出できるんじゃないかと思つたの。<sup>94</sup>だからこの装置の素材に使つた元素は論文とはちよつとちがうんだよ」

「まつて、そんなことはありえないよ。もし検出できても、それはタキオンじやない。すくなくともタキオンとはまったく異なる性質の粒子を検出したことになる」と、そこまでいつて、わたしは気づいたのだ。彼女が見つけたのは、すくなくともこれまで予想されてた性質をもつタキオンではない。理論上、タキオンを検出するには、わたしが論文で書いた方法でないと不可能のはずだ。テーリーが見つけたのは、理論でもまだ予想されてなかつた性質をもつタキオ<sup>95</sup>ンだ。

「ぼくは理学もすきだけど、根が工学部だからさ。理論上ありえなくとも試したくなつちやうんだよ。たぶん、エミリーにはそういう精神が足りなかつたんだと思つ」

理論上ありえない？ それは違う。理論は現象を説明するものだ。もし理論上ありえない現象が存在するならば、理論はそれを説明できるように修正されるべきだ。ただ、テーリーが見つけたものは理論上ありえなかつたわけじやない。理論がカバーしきれてなかつただけで、ありえるとも、ありえないともいえなかつた対象だ。だからわたしはいつた。「わたしは、理論の範囲で予想されるものしか探そつとしなかつた。だからそれを見つけられなかつたんだよ。テーリーは、理論を無視して探そつとした。だからそれを見つけられた。でも、理論上ありえな

いつでいつたら理論がまちがつてたみたいに聞こえるから、訂正させて。理論は正しかつた。でも、網羅的じやなかつた。テーリは理論が否定も肯定もしなかつた現象を発見したんだよ。テーリが発見した現象を前提に、新たな理論が構築できるかもしぬれない。きっとその理論は、テーリが今回見つけた以上にたくさんの現象の存在を予言すると思う。それがわたしの仕事だと思つてゐる。それにもしかしたら、テーリが検出したのはタキオンでもなんでもない、既知の電磁波かなにかかもしれないしね。テーリが見つけたものを理論的に説明する仕事がまだまだ残つてゐる」

<sup>97</sup> 思わず矢継ぎ早に話してしまつて、彼女がぽけーつとしてるのを見て焦つた。いきなりこんな話を立て続けにしても、みたいな。でも、そのあと彼女がおかしそうにいつた。「ひとつ訂正させて。見つけたのはエミリーだよ。ぼくはすこし方法を修正しただけ。エミリーがもつといろいろな発見をすることを、楽しみにしてるね」

## 第一〇章

空港でテーリから世界を変えるようなニュースをさらつと聞かされたあと、わたしたちは力フエでコーヒーを飲みながら、そのことに関する議論で盛りあがつてた。<sup>2</sup> 彼女は根っからの工<sup>3</sup>ンジニアで、完璧に実験装置を開発してしまつたものの、タキオンの性質にはうといようだつた。わたしは繰りかえすようにいつた。「だから、タキオンはそれ自体が過去へ進んでるわけじゃないの。単に光速以上の速度で運動してるだけ。だからテーリが観測したタキオンも、未來からきたものじやなくて過去からきたものつて可能性のほうが高い」

彼女はわたしがレシートの裏に描いた図を指でなぞりながらいつた。「つまりこの図における縦軸が時間、横軸が空間を表してゐるわけだね。えつと、要するにタキオン自体が過去へ進ん

でるんじやなくて、うまくすればタキオンを過去へ送れる装置が開発できる、つてことなかな」

<sup>5</sup>「そう。自然状態ではタキオンも過去から未来へ向かつて進んでるの。それを利用すれば過去へ情報を送る装置が開発可能、というだけ。テーリが検出した粒子はどうやらチエレンコフ光を放射してるように、おそらくタキオンである可能性が高い。でも、それがいきなり未来からの情報を検出したということではないの」

<sup>6</sup>「彼女は残念そうに両手で頬杖をついた。「うーん、じゃああれはむだだつたのかあ？」

<sup>7</sup>「あれ？」

<sup>8</sup>「先々週ね、検出したタキオンを分析してみたの。もしかしたらなんらかのプロトコルでコードできるかもしないでしょ？ でも、自然発生したタキオンだつたらそういうことしても無意味だつたなあつて」

<sup>9</sup>わたしはおかしくなつて思わず笑つてしまつた。「だれが、なんの目的でタキオンをそのプロトコルでエンコードするわけ？ そんなこと考えるのなんてわたしくらいだと思つてたよ」

<sup>10</sup>彼女は真つ赤になつて机に手をついて身を乗りだし、反論してきた。「だつ、だつて、もともとエミリーはそういうことが夢だつていつてたから！」

<sup>11</sup>「夢は夢だけさ、でも最近は非現実的だつて思うようになつたよ」

<sup>12</sup> 「非現実的でも、やつてみる価値はあると思うんだよ！」

<sup>13</sup> 「そうだね、たしかに」

<sup>14</sup> 「検出したタキオンが未来からきたものなのか、過去からきたもののか区別する方法はないの？」

<sup>15</sup> 彼女のすごいところは、専門分野でなくともいつやつて何事にも興味をもつところだ。<sup>16</sup> しかも無知を恥ずかしいと思わずに、わからないことはどんどん質問してくる。<sup>17</sup> それが彼女の知識の源泉だとと思うし、きっとポジティブな性格がそうさせるのだろう。わたしは答えた。「タキオンだけを見て、つてのは無理だと思う。たとえるならそうだな、鏡に映った映像だけを見て、それが鏡に映つたものなのか現実のものなのかを判断する感じ。ある画像と、その画像を左右反転した画像があつたとして、どっちがオリジナルのかつて判定するのは一般には難しいでしょ」

<sup>18</sup> 「つまり過去から現在にきたタキオンも、未来から現在にきたタキオンも、現在のぼくたちに見てみればまつたく同じものにしか見えないってこと？」

<sup>19</sup> 「そう。そもそも、タキオンを使えば未来から過去へ情報を送れるっていうのも、ローレンツ変換が正しいとすればという話だしね。もちろんいまは相対論が正しいと考えられてるから相対論が依拠するローレンツ変換も正しいと考えるのがふつうだけど、そもそも相対論がタキオ

ンを記述できるのに適してなくて、タキオンを記述するのにもつと適した理論があつてかつ、その理論ではタキオンを過去へ送れないかもしだい。もちろんそれでも相対論がまちがつて<sup>21</sup>たことにはならないけど、でも相対論がすべてを記述できるわけじやないから」「うーん、じゃあ仮に未来から過去へタキオンが送れるとして、だよ。エミリーはどうやつてそのことを確かめようと思う?」

わたしはしばらく鉛筆をまわしながら考えて、答えた。「すくなくとも過去へ送るには、なんらかの装置を開発する必要がある。なら、装置を開発する知性が必要だね。つてことは、タキオンをデコードしてみてなんらかの知性的な兆候がみられるメッセージがあつて、かつそのメッセージに未来から過去へ送つたことを示唆する言葉が含まれてたら……まあ、それを信じるしかないんじゃないかな」

彼女はそれをふんふんと興味津々に聞いてて、わたしはなんだかうれしかつた。それから彼女はまたたずねてきた。「じゃあ逆に、ぼくたちがいまから過去に情報を送ることは可能だと

<sup>22</sup>思つ?」

「ううん、それは無理じやないかな。まだ検出できたかどうかの段階だし、人工的にタキオンを生成するにはまつたくべつの理論が必要。仮に生成できたとしても、それを過去へ送るためにはまたべつの技術が必要だし、まあいざれ可能になるかもしだいけど、わたしが生きてる

<sup>25</sup>「あいだには無理だなつて思つてるよ」

<sup>26</sup>「そつかあ。けつこう先行き不安な感じなんだね」

「そんなことはないよ！ 半世紀まえには、そもそも検出することすらできなかつたんだからね。チエレンコフ光だつて、そのころにはもう理論としては予想されてた。でもだれも観測できなかつたからタキオンは存在しないと思われてたんだよ。それが存在することを実証できたんだから、それだけでも大きな前進だよ。だからテーリはすごい！ わたしのすきな言葉を引用するなら、これは——ひとりの——人間にとつては小さな一步だが、人類にとつては偉大な飛躍である。だよ！」

<sup>27</sup>「ニール・アームストロング船長の言葉だね。月面への第一歩」

<sup>28</sup>「そう。わたし、かれやかれの言葉が大すきなの。人類の科学は、ひとりひとりの人間が小さな一步を確実に重ねて発展してきた。それを象徴するようなできごとのような気がして！」

<sup>29</sup>「そうだね、ぼくもそう思う。たださつきもいつたけど、これはぼくの業績じやなくて工ミリーの……」

<sup>30</sup>「ううん、それはちがう。テーリのアレンジがなかつたらできなかつた発見だよ。だからそれはテーリのなの！」

<sup>31</sup>そういうと彼女はこそばゆそうにした。

<sup>32</sup> それからわたしたちはなんとなく話題が尽きてしまった感じで、しばらくお互に黙りながら「コーヒーに口をつけたりしてた。彼女はカフェモカがすきらしい。<sup>33</sup> そういうえば気にしてなかつたけど、テーリーがコーヒーのたぐいを飲んでるここを初めて見る気がする。<sup>34</sup> それでわたしはなんとなくたずねた。「コーヒーは飲めるようになつたの？」<sup>35</sup>

<sup>36</sup> 彼女はいきなり聞かれてびっくりしたようで、むせて咳きこんだけどすぐにもちなおして答えた。「最近ね。でも苦いのは苦手。カフェモカは甘くてすき」

<sup>37</sup> 「そつかあ」

<sup>38</sup> とはいえそれからどう話を発展させたものか考えてたわけではなかつたので、またしばらくの沈黙。<sup>39</sup> なんとなく気まずくなつてきた感じがしたときには、彼女のほうから口を開いた。<sup>40</sup> 「ところで話変わるけど、エミリ一って一〇〇の光年ダイアリーって知つてる？」

<sup>41</sup> わたしは知らなかつたので素直に答えた。「知らない。なにそれ？」

<sup>42</sup> 「グレッグ・イーガンつて作家の短篇。知らないならいいんだけど。じゃあ未来からのホット

<sup>43</sup> ラインは？」

「あ、それは知つてた。ジェイムズ・P・ホーガンの小説だよね。修論のアイデイアを指導教官に話したとき勧められてね。名作らしいから読んだよ」もつとも、それはわたしの論文がSFであつて科学ではないという嫌味のような氣もして、あんまり勧められてうれしいつて感

<sup>44</sup>「ではなかつたんだけど。

「じゃあ、内容も知つてると思つけどいちおう話すと」

<sup>45</sup>「いやいやいや、いいよ。うん、知つてゐるから。未来と過去で通信して、なんやかんやで地球が絶体絶命！でも主人公の活躍のおかげでめでたしめでたしつつ感じの話だよね。うん、おもしろかつたよ」

<sup>46</sup>「そうそう。ストーリーの都合もあるんだけど、あの世界だと未来から情報を送ることで、過去を変えられるの。ある意味では王道だよね。過去の問題を未来から解決するつていうのは。でもさ、さつき話した一〇〇光年ダイアリーだと違つてさ」

<sup>47</sup>それを聞いて、わたしはなんとなくその短篇に興味をもつた。「うんうん、それで一〇〇光

<sup>48</sup>年ダイアリーだとどうなるの？」

「あー、うん。ネタバレしていいのかなあ、くわしくは読んでみて！つてほんとはいいたいんだけど、流れ的に話すと、あの世界だと過去は変えられないの。主人公は悲惨な未来を知つて、その未来をとめるべく過去に伝えようとする。でも、その未来はどうやっても変えられないの」

<sup>49</sup>それを聞いて、なんとなくレマのいつてたことを思いだした。たしかに、物理学的にはそつちのほうが正しい解釈だ。でも、とわたしはたずねた。「それでどういうストーリーが展開さ

<sup>50</sup>れるの？ なにをやつても過去を変えられない、ってそれじゃあ、つまんない？」

<sup>51</sup>「ねえ、ふつうはそう思うよねえ！ それでもおもしろくしゃうのがイーガンのすごいところだよ」

<sup>52</sup>「それでそれで、結局どういうふうになつておもしろくなるの？」

<sup>53</sup>「さすがに未読の相手にそこまでは」

<sup>54</sup>「えー、けちー」

<sup>55</sup>「知りたかつたら実際に読んでみてね」

「<sup>56</sup>彼女がそういう話題をだしてくれたので、わたしもその手の話題ですきな映画をだしてみた。 「バック・トゥ・ザ・フューチャーって映画が好きです」

<sup>57</sup>「知つてる！ だいぶ古い映画だけど、おもしろいよね！」

<sup>58</sup>「見たことあるの？」

<sup>59</sup>「うん。 もともとあれつてパート一だけで完結のはずだつたらしいよね。 パート二、三は人気がでたからあとからつくられたんだつて。 パート一だけだと結局あれつて過去は変わつてないのかなあ、みたいな解釈もできるよね」

<sup>60</sup>「たしかに。 マーティンの父親はだいぶ変わつてたけど、ドクはもしかしたら最初から対策してたのかもね。 ていうか、テリーつて過去が変えられるかどうかとか、そういうところが気にな

<sup>60</sup>「うの？」

<sup>61</sup>「うん。過去は変えられないほうが科学に対して誠実かなあ、みたいな」

<sup>62</sup>「たしかにそうかもしないけど、わたしは過去が変えられるという仮定のもとで、どういう話が展開されるかのほうが気になるかな」

<sup>63</sup>「でもでも、過去が変えられるとすると因果律とか破れちゃつてたいへんじやん。そのあたりどう思う？」

<sup>64</sup>「まあ、うん、現実じやないんだしファイクションならほどほどにつて感じ」

<sup>65</sup>「彼女はつまらなそうに答えた。「そつかあ。あ、そうだつ」彼女は「ヒーヒーのトレーを横にずらし、バックパックから例のタキオン検出装置と、どうやらその設計図らしい図面とその装置のアイデアのスケッチをだして、机のうえに置いた。「せつかくだし、これ、あげる！」「いらない？」

<sup>66</sup>「ええつと、突然だね。いることはないけど、テーリ、もう飽きちゃつたの？」

<sup>67</sup>「すると彼女は吹きだして、それから恥ずかしそうに口元を隠して笑いながら答えた。「飽きたやつたつてことはないよ。でも、ぼくこれのコピーもつてるから。エミリーになにかの参考にしてほしいなって」

<sup>68</sup>「わたしはそれを受けとつて、図面やスケッチをまじまじと見た。よくできる。論文には装

<sup>69</sup>

置の図面なんて書かなかつたのに、わたしは製作したプロトタイプと完璧に同じようにつくつてある。<sup>71</sup> アイデアのスケッチのほうは、わたしは試してない元素でタキオンが検出できると仮定した場合に、既知の理論をどのように修正すればよいか。わたしは既知の理論を仮定してタキオンを検出できる元素を導出したけど、彼女は既知の元素でタキオンが検出できると仮定して新しい理論を考えてる。<sup>72</sup> すばらしい、としかいいようがない。<sup>73</sup> 「うれしいけど、図面やスケッチはともかく、装置までもらうわけにはいかないよ。つくるのたいへんだつたでしょ？ こつちで追試も兼ねてつくつてみるから、さ」<sup>74</sup>

すると彼女はしらつとバックパックからまつたく同じ装置をもうひとつとりだした。「だいじょうぶ、じつはもうみつつ、つくつたんだよ。ひとつめは試作品、ふたつめは問題点を洗いだしして微修正したうえで追試も兼ねて、みつつめはせつかくだしエミリーにあげようと思つて！」<sup>75</sup>

「すごい。<sup>76</sup> わたしが彼女に連絡したのが、たしかだいたい三ヵ月まえだ。<sup>77</sup> つてことは、わたし  
が連絡した直後に論文を読んだのだとしても、論文を読んでたつた三ヵ月でここまでやつてしまつたことになる。<sup>78</sup> まさしく天才だ。<sup>79</sup> わたしは答えた。「ありがとう。せつかくだし、受け  
とつておくな。でも、わたしのほうはなにも用意してなくて申しわけないんだけど……」<sup>80</sup>  
「ううん、気にしなくていいんだよ。あ、そうだ。お返しを求めてるわけじゃないんだけど、

<sup>82</sup>「じつは話があつて……」

<sup>83</sup>「わたしにできることなら、なんでもするよ！ 話つてなに？」

すると彼女は話しくそりに、口をむかじむかせていなつた。しばらくして決心したよう

に。「あー、うん、やつぱり、いまはいいや。もつとそのうか、うちの上司から話がいくと思

<sup>84</sup>「うよ」

<sup>85</sup>「上司？ 仕事の話？」

「仕事つていうか、うーん、まあ。そんなところだけど、ぼくから話すのはやつぱ違うなあつ

<sup>86</sup>て！」

<sup>87</sup>「なにそれ、気になる。どんな話？」

<sup>88</sup>「そのうち、ね。いまは話せない。ごめんね。それより、今度月に連れてつてくれない？」

「月に？ 行きたいなら、お金はかかるけどだれでも行けるよ。まあでも、天文台の職員のパ  
スポートがあれば割引されるからね。業務上の同行者にも適用されるし。テーリは業務上じや  
ないけど、まあそのへんあんまお固い感じの制度じやないからだいじょうぶ。じゃあ、いつご  
ろ行きたい？」

<sup>89</sup>「いやいや、いますぐには決められないよ。都合のいいとき誘つて。ぼく、一度でいいから月  
に行つてみたかつたんだ！」

<sup>90</sup>  
「そつか。じゃあ、今度誘うよ。今回のお返しつつことで、さ」

## 第一一章

□サンゼルスでテーリーと再会したあと、わたしはサンディエゴの南方、北緯〇度二分二〇秒西経一一七度五分五〇秒、赤道直下の公海上に位置するルズベテル<sup>1</sup>という人工島をおとずれた。<sup>2</sup>ルズベテルはニユートンズ・クレードルと呼ばれる宇宙工レベータのアースポートとして建造されたメガフロートだ。<sup>3</sup>ルズベテルという名称は、クレードルのことをヤコブの梯子にたとえ、その梯子が降りたとされるルズという町にちなむものだ。ヤコブはその梯子が降りたのを見て、ルズをベテルと名づけたのである。

<sup>4</sup>クレードルの上空の静止軌道ステーションには、宇宙船を発射するための電磁カタパルトがそなえられている。地表から月へ宇宙船を飛ばすには重力をふりきるだけの速度が必要だし、そ

れだけ大量の燃料が必要だ。その点、静止軌道からなら宇宙船を飛ばすのにかかる費用が少なくて済む。<sup>7</sup>したがって、わたしたちが月へ行くときはまず宇宙エレベータで静止軌道まで行き、そこから宇宙船に乗るということになる。<sup>8</sup>

宇宙開発で得られた鉱物資源などはたいていクレードルとルズベテルを経由して世界各国へ運ばれるため、ルズベテルは交易の場としても重要で、都市としての開発も進んでる。<sup>9</sup>もつとも、工業的な施設ばかりでいまのところあまり住むには適してないのだけど、静止軌道ステーションが観光地として大富豪から非常に人気が高いため、かれらを目あてにさまざまな企業が進出してくるのだ。<sup>10</sup>

ルズベテルの空港からすぐ先に見えるのは仙丹製薬という台湾で創業した世界企業の巨大な店舗で、つい最近建てられたばかりだ。四カ月まえ初めてここにきたとき、そして三週間まえ通つたときはまだ工事中だった。<sup>11</sup>仙丹製薬は仙丹と呼ばれる、テロメアに作用して寿命を延ばす薬品を開発して大成した製薬会社。<sup>12</sup>要するに細胞老化を遅らせる薬で、一錠あたりおよそ八時間、細胞の老化を遅らせることができ、若いうちから毎日三回、継続して服用しないと効果がない。そのうえ非常に高価で、一錠一〇〇〇ドルもするので一年あたり約一〇〇万ドルもかかり、現状、名だたる大富豪しかその恩恵にあずかることができないのだ。<sup>13</sup>そのような価格設定で採算がとれるようなので、それだけ需要があるということなのだろう。

<sup>14</sup> 以前ヴエリティが「おすそわけ」といつてくれた例の薬を、わたしはまだもつてた。彼女によれば、これはいま仙丹製薬が開発中ということなので、わたしはなんとなく仙丹製薬に寄つてみることにした。

<sup>15</sup> ルズベテルの仙丹製薬はオフィスや病院も兼ねた店舗で、一階から二階が薬局、三階から六階は仙丹製薬附属病院、七階と八階がオフィスになつてゐるようだつた。ロビーにはちらほらとひとがいて、社員らしいひとがほとんどだつたけど、かなりリッチそうなお客様も少なくないようだつた。ロビーではちょうどふたりの有名な中国人女性が立ち話をしてて、わたしはかれらを見て、どぎまぎしてしまつた。かれらが中国語で話してゐるようで、わたしにはかれらがなにを話してゐるのかが理解できなかつた。そんなとき以前、ディーサから翻訳アプリをもらつてたことを思いだし、起動してみたのだ。音声はイヤホンから出力されるようにして、わたしはすこしかれらと距離を保つた場所で怪しまれないよう休憩してゐるふりをしつつ、かれらの話を聞いてみた。

<sup>17</sup> 「いやあ、ここはよきオフィスね。いいものを見せてもらた。ありがとう、イエ」といつたのは仙丹製薬の筆頭株主で香港の公認マフィアの龍頭、チエン・スーシューである。彼女の外見は一〇代に見えるほど幼いけど、実際は六〇代の女性で、五〇年近く仙丹で若さを保つてといわれてるのだ。彼女の周りには常にスーツの男たちが警護しており、おそらくマフィアの仲

<sup>18</sup>間たちではないかと思われた。

「新しいオフィスよ。筆頭株主に紹介するのは当然の義務じやない？」こちらは仙丹製薬の創業者かつ会長でCEOのイエ・シャオオシュー。彼女は遺伝医学の博士で仙丹の基礎理論を構築し、仙丹を開発した人物だ。彼女もまた、二〇代後半に見えるものの実際は七〇代なのだ。

<sup>19</sup>「しかしイエ、ここにお客がくる見こみはあるか？ 採算はとれるかね？」

<sup>20</sup>「いまは無理でしようね。これは投資よ。扶桑国は五〇年以内に世界都市へ発展する。そのとき、土地の価格はコードウェイベイを超えると見こんでるわ」扶桑国というのは、中国におけるルズベテルの異称らしい。

そう聞くとチエン・スーシューはおかしそうに笑つた。「イエの見こみはよくあたる。信じ

<sup>22</sup>てるよ。ところで、なにか匂わないか？」

<sup>21</sup>「気づいた？」

<sup>23</sup>「よい薬の匂いね。おいしそうだ」というと、彼女はわたしのほうを見てきたのである。

<sup>24</sup>「やれやれ、まだ品質には改善の余地があるようね。無臭にしろとあれだけいったのに」

<sup>25</sup>「許してやるね。ふつうの人間には嗅ぎとれない程度のかすかな匂いよ。ところで、彼女は何

<sup>26</sup>「者ね？」

「知らない。治験のだれかじやない？ 薬のもちだしは厳禁なのに」

わたしは盗み聞きはともかく、さすがにこの距離で薬に気づかれるとは思つてなかつたので<sup>27</sup>、焦つて店舗からそそくさとでたの<sup>28</sup>だつた。

まさか仙丹製薬の創業者と筆頭株主がいるなんて思つてもなかつたし、よりにもよつてヴェリティから預かつた薬に気づかれるとは予想だにしなかつた。<sup>29</sup>仙丹製薬という企業は、歴史的にマフィアと関係が深い。<sup>30</sup>いまとなつてはスーシューの属する素数会というマフィアは例外的に活動を認められてるけど、今まであまりよいうわさは聞かない。

わたしは走つて仙丹製薬から見えない道にまがり、そこで脚に手をついて息をきらしてた。<sup>31</sup><sup>32</sup>つきりかれらが追つてくるものかと思つたけど、そんなことはなかつた。<sup>33</sup>なんとなく悪いことをしてゐる気がしたけど、かれらにしてみてはどうでもよいのかもしない。<sup>34</sup>とはいえ、ひとつわかつたこととしては、ヴェリティがいつてたようにあの薬は仙丹製薬で実際に開発されてるらしいということだ。<sup>35</sup>

それから、わたしは以前、レマがミナガワ博士を過去へ送りもどす間際、彼女がいつてた言葉を思いだした。たしか、彼女はミナガワ博士に、こういつたのだ。イエ・シャオシューに伝えてほしいことがあると。イエ・シャオシューは仙丹製薬の会長で、いままさにここにいる。もししかしたら彼女は、レマについてなにか知つてゐるのかもしれない。<sup>36</sup>だとすればわたしにも無関係なことじやないはずだ。

そこでわたしはふたたび仙丹製薬に戻り、彼女に話をうかがうことにした。<sup>40</sup>ロビーで、わたしは受付の女性にたずねた。「イエ・シャオシューという方はいますか？」

<sup>41</sup> 彼女は答えた。「会長なら現在八階のオフィスにおられますよ。なにかご予定でしようか？」

<sup>42</sup> 「予定はありませんが、用件があります」

<sup>43</sup> 「会長はお忙しい。それなら事前にアポをとつてください」

<sup>44</sup> 「緊急なんです。ミナガワ・コーリといえばわかります」

<sup>45</sup> 彼女はミナガワ博士の名前を知らないようだつたけど、イエ・シャオシューは知つてゐるはず

<sup>46</sup> だ。彼女は答えた。「しばらくお待ちください」

それからほどなくして面会の許可があり、わたしは八階のロビーに向かつた。<sup>47</sup>エレベータはガラス張りになつてて、ルズベテルの全貌が見渡せた。ルズベテルは直径約二・五マイルの環状の人工島で、その中心には合衆国宇宙工レベータ、ニュートンズ・クレードルがそびえたつ。<sup>48</sup>それを除けばこの島でもつとも大きい施設は空港で、島の大部分が飛行機の滑走路になつてゐる。島の端といふ端には港があり、内陸部の空港と港にはさまれるようにして工業施設がな

<sup>49</sup> らびたつ。

ルズベテルの景色に圧倒されるうちにエレベータは八階につき、わたしはそこで降りた。

八階のロビーはまだ閑散としており、輸送業者が向かいの業務用エレベータからつぎつぎ荷物

を運びいれて、社員たちが業者によつて無造作に床に置かれた荷物をあるべき場所に移動してた。<sup>51</sup> イエ・シャオシューとチエン・スーシューは奥のほうで窓のそとを眺めながらなにやら話しており、わたしは世界有数の富豪を騙すという勇敢というか無謀というかな行動にわたし自身驚きつつ、かれらのもとへ向かつた。

<sup>52</sup> 最初に口をひらいたのはイエ・シャオシューだつた。翻訳アプリは起動してたけど、それは炎要なかつた。彼女は流暢な英語でこういつた。「亡靈がたずねてきたと思つたけど、どうやらちがつたようね」

<sup>53</sup> わたしはその言葉の意味がわかつたけど、チエン・スーシューにはわからなかつたようで、彼女は中国語でこういつた。「彼女はミナガワさんと違うか？」

<sup>54</sup> イエ・シャオシューは彼女と話すときは母国語で話すらしく、中国語でこう答えた。「ちがう。見たこともない。でも」それから彼女はチエン・スーシューからわたしに言葉の先を変え、英語でつづけた。「なんの用？ こうやつて話すだけであなたの年収以上の損害がでるのよ。くだらない用件ならすぐ帰つてもらう」

そういうわけで、わたしはちよつと躊躇してしまつたけど、ここまできてなにもいわずに帰るのはそれこそ失礼だ。「わたしはNASAのエマ・リバーズです。じつは、あなたがミナガワ博士の知りあいだと聞いてきました」

<sup>56</sup> 「だから？」彼女の顔つきは怪訝だつた。「知りあいなのは確かだけど、彼女はもう三〇年

<sup>57</sup> もまえに亡くなつたのよ」

「その」わたしはなんといつてよいかわからなかつた。わたしは正直に真実を述べた。「ミナガワ博士は生きてるんです。いまは月の裏側国際天文台に勤務してます。調べてもらえばわかります」

そういうとチエン・スーシューがなにやら端末で調べごとを始めた。どうやら彼女は英語は話せないけど聞きとれはするようだ。ほどなくして彼女は中国語でいつた。「ほんとね。すぐなくとも同姓同名の人物はいるようね」

<sup>59</sup> イエ・シャオシューは明らかに驚いて中国語でいつた。「あり得ない。正確なの？」

<sup>60</sup> 「公式サイトに写真も載つてるね。これを偽造するのはちょっと難しいと思うが」

<sup>61</sup> 彼女はそれを見て納得したように、英語でたずねてきた。

「それで、それを伝えにきたのか？」

<sup>62</sup> 「いいえ、そうではありません。じつは、おうかがいしたいことがありますて。三〇年以上ま

<sup>63</sup> え、ミナガワ博士がイエさんになにか伝えたことがあるんじやないかと聞きたいんです」

<sup>64</sup> 彼女はいぶかしげに答えた。「三〇年もまえの話の内容をいちいち覚えてると思う？」

<sup>65</sup> 「重要なことなんです。なにか、覚えてませんか。きっと記憶に残るような言葉です」

「……」彼女はしばらく黙つてたけど、やがて思いだしたように答えた。「五〇年近くまえ

<sup>66</sup>ことよ。当時わたしは学部生だった。そんなある日、彼女からあることをいわれたの「

<sup>67</sup>「それは……？」

「院に進んで遺伝医学を修めるようたきつけられたの。彼女の言葉がなかつたら、おそらくわたしは遺伝医学を修めず、仙丹は生まれず、このオフィスもなければ、わたしたちも生きてないかすくなくとも年相応の老婆になつてたでしょ<sup>う</sup>」

わたしは思つた以上に重大なことを聞いてしまつた気がした。<sup>69</sup> 彼女が体験したことは、いままさにわたしが体験したことと同じだ。<sup>70</sup> ということは、わたしはやっぱりこれからなにか仙丹のような偉大な発明や発見をするけど、レマの言葉ひとつでその歴史がなかつたことになるので、彼女が未来からわたしになにか伝えようとしているということ。

<sup>71</sup> 「そのときの彼女の言葉はたしかにおかしくて、いまでも記憶に残つてるわ。わたしが遺伝医学を専攻することは決まつてるとか、そうしなければ重大な歴史がなかつたことになるとか、まるで未来がわかつてゐみたいにいつてた。わたしからもひとつ質問してもいいかしら。あなたは、彼女のことでなにを知つてゐるの……？」

わたしは答えるべきが答えざるべきか迷いつつ、彼女も話してくれたのだからわたしも話すことにして。わたしは彼女に、レマとミナガワ博士のこと、かれらのことでこれまで見聞きしたすべてのことを話した。<sup>73</sup> それらの話を聞いて、イエ・スーシューはこういつた。「なら、わ

たしたちがここで出逢うことにも、なにか意味があることなのかもね。わたしが仙丹を発見してなかつたら、なし崩し的にあなたがするという、その、未来と過去の通信も発明されないということなのかしら」

<sup>74</sup> チエン・スーシューはわたしの話を聞いて、終始笑つてばかりだつた。「イエ、そんな話を

真に受けてどうするね。彼女の話が真実だという証拠が、これまでひとつでもあつたか?」

<sup>75</sup> 「チエン、ミナガワさんは生きてたのよ。それも仙丹なしでね。この三十年の空白期間をどう

<sup>76</sup> 説明するつもりかしら」

<sup>77</sup> 「簡単ね。このリバーズという小娘は、同姓同名のうりふたつな別人を見つけてきたよ。考えてもみるね。うちらは、まだ彼女のことをIDでしか知らないよ。きっと、直接彼女と話して

みれば別人とわかるね」

<sup>78</sup> 「じゃあ、同一人物だとわかつたら?」

<sup>79</sup> 「そういうあり得ない場合を考えても仕方ないね。だいたい、事実だとしてイエにはもう関係ないことじやないか。仙丹はもう発見されたわけだから」

<sup>80</sup> 「わたしはあるのとき、どうしてミナガワさんがわたしにああいつたのかを知りたいの」「まあ、そういうことならいいけどね。うちならいまここでリバーズくんの眉間に、バン!と弾丸をくれてやるね。秘密が漏れる可能性は少ないほうがよろしいからね」

<sup>79</sup> イエ・シャオシューはあきれたようにわたしに向きなおり、続けた。「でも、わたしがいな  
いことであなたになにか影響はあるのかしら。その、レマ・リバーズという方の目的はあなた  
なのでしょう。それともわたしとあなたのこととは別々に、それぞれなされるべき発見が確実に  
起こるよう歴史を操作してるというだけで、わたしとあなたになにか関係があるということ  
ではないのかしら」

<sup>80</sup> わたしは答えた。「わかりません。わたしが知つてることはすべて話しました。むしろ、あ  
なたが彼女のことわざにか知つてると思ったんです」

<sup>81</sup> 「なるほどね。じゃあ、そろそろこの話は終わりにしましよう。最初にいつたとおり、わたし  
の時間は空くないのよ。それと、最後にひとつ、聞いておきたいことがあるのだけど」

<sup>82</sup> 「なんでしょう」

<sup>83</sup> 「あなた、薬をもつてるわよね。バッグのなかに、いま開発中の。隠せると思つたのかしら。  
それはどうやつて入手したの?」

<sup>84</sup> わたしはすっかり忘れてた話題に言及されてどぎまぎしてしまつた。「えつと、これはヴェ  
リティ・バーーという友人からもらつたんです。大株主と聞きましたが」

<sup>85</sup> 「ああ、バーーさんの」

<sup>86</sup> チエン・スーシューもその言葉に反応した。「バーーくんか。やれやれ、つぎの株主総会で

釘<sup>87</sup>を刺しておく必要があるね」

どうやら、ヴエリティは仙丹製薬ではそこそこ有名らしかった。それにしても、チエン・スーシューは仙丹製薬の筆頭株主で、立場的にはヴエリティより上のはずだ。わたしは翻訳アブリを英語から中国語への設定にして、翻訳された言葉をスピーカーから出力するようにし、くれぐれも頼んだ。「いえ、彼女は悪くありません。いろいろあつて、その。わたしが試験を買つてでたんです」

チエン・スーシューはにやりとした。「ほう？ なるほど、さつきからアブリでうちの言葉を聞いてたわけだ。なら中国語で話しても平気ね。聞いておきたいのだが、要するにバレーくんは本来秘密にすべきことを友人に隠しきれなかつたわけだね？」

「<sup>89</sup>そういうわると、どう答えればよいかわからない。わたしは縮こまつてしまつた。<sup>90</sup>」イエ・シャオシューが彼女を制止した。「やめなさい。あなたの半分も生きてなさそうな若者をいじめるなんて大人気ないわよ」

「からかつてるだけね。こういう初々しい反応を見るのが楽しいからね」

「<sup>91</sup>ちょっと気に障つたけど、たしかに、本来はかれらのいうことが正しい。秘密を守るのはもつとも基本的な義務だからだ。そこでイエ・シャオシューが提案してきた。「例の薬はまだ開発段階で、秘密保持は絶対なの。だから、あなたをみすみす見逃すことはわたしの立場上で

きないわね。わたしはいいけど、株主が納得しない。そこで、どうかしら。正式に治験の契約をしない？ それなりに危険な薬だから基本的な報酬もよいし、場合によつては、さらに上乗せで支払われるわ」

<sup>93</sup>「上乗せつて、いくらぐらい、どんなことをしたらもらえるんでしょうか」

<sup>94</sup>「薬の効能が映像記憶だつてことは聞いてると思うけど、いちおう説明しておくわね。それを一度飲むと、二四時間ほど覚えたことを写真に撮つたように記憶して、忘れなくなる。その効果を実証するために、ある試験を受けてもらうわ。簡単な筆記試験よ。それなりに大きな桁の数字を覚えるつていうだけの。成績の上位何名かは薬の効果を示す実例として報告書に載せることになつて、そのため大きな報酬が支払われるの。金額は最大で三〇万台湾元くらいね。あ、ドルがよければドルで支払うわよ」

<sup>95</sup>「わたしはそれを聞いたとき、ヴエリティのある言葉を思いだした。わたしが夢を果たせないのは、お金がないから。<sup>97</sup>もしかしたら、これは彼女がくれたチャンスなのかもしれない。それを受けた受けないか、わたしはいますぐ答えをだせない気がして、答えた。「えつと、すぐには答えられません。いずれ……」

<sup>98</sup>するとチエン・スーシューがふとももの銃をちらつかせていつたのだ。「なにか勘違いしていないか？ 断れるわけないね。ここまで秘密を知つた人間が選べる道は、死ぬか従うかのどっち

「うかね」<sup>99</sup>  
わたしはそれで初めてかれらがマフィアだということを知識ではなく身体で理解した気がして、全身に鳥肌が立つたのだった。

## 第一二章

月の表面にはいくつか、月の溶岩洞と呼ばれる縦に細長いチューブのような洞窟がある。<sup>1</sup> 代表的なものは静かの海、賢者の海、マリウス丘にあるもので、二〇〇九年ころにJAXAの月探査機かぐやが発見した。<sup>2</sup> さらに二〇一七年には、かぐやが観測したそのデータをくわしく分析した結果、マリウス丘の溶岩洞の地下には長さ約三〇マイルにおよぶ巨大な空洞があることが明らかとなつた。<sup>3</sup> そのあとほどなくして静かの海にも同様の空洞が存在することがわかつたのだ。月は地球より大気が薄いため地表では人体に有害な宇宙線が降りそそぐけど、地下なら地表が重厚な壁となつてそれを防いでくれるため、人類が月で暮らすのに適した環境だと考えられた。停滞してた月開発を再燃させるきっかけとなつた、偉大な発見だ。

<sup>6</sup> 静かの海はある有名なアポロ一号の着陸地点で、地理的条件も良好だつたため、JAXA の報告のあとすぐにNASAがその地下空洞にまず小さな基地を開発し、ゆくゆくは巨大な都市に発展させる計画を立案した。<sup>7</sup> 月の裏側国際天文台がもともと月の裏側に無人基地として JAXAによつて開発され、歳月とともに人間が住むように拡張されてきたのに対し、地下空洞の基地はもともと人間が住むため、NASAの主導で開発がすすめられた。<sup>8</sup> 人類が初めて旗をたてた場所だから、その基地および都市はファースト・フラグ、一番旗と命名された。<sup>9</sup> 静かの海の南西、神酒の海の西にあるデカルト高地という場所には、将来観光地となることを予定してまたべつの基地の建造がおこなわれてる。<sup>10</sup> 地下空洞は住むには適してるけど、宇宙から地球を眺めるためには地表にも基地があつたほうが便利だ。<sup>11</sup> デカルト高地は一九七二年、アポロ一六号が着陸した場所で、人類が五番めに旗をたてた場所だから、ファイフス・フラグ、五番旗と呼ばれた。

<sup>12</sup> 静止軌道ステーションはある種の空港のようなものだ。<sup>13</sup> 就航している宇宙船は、月と地球を往復するソユーズが代表的。<sup>14</sup> もちろん、静止軌道ステーションは研究施設としても機能して

し、ここで勤務してゐるひともいる。でも、わたしにとつては単なる月への通過点だ。

<sup>15</sup> <sup>16</sup> 月には弱いといえ重力がある。<sup>17</sup> それに対して、静止軌道ステーションは完全な無重力状態。上下や左右という感覚の意味がなくなり、まるで鳥になつたみたいにふわふわ飛んでどこへで

もいける感じは、言葉では表しようのない感動をわたしにもたらしてくれる。

<sup>19</sup>わたしは宇宙エレベータで静止軌道ステーションまで行き、しばらくそこの待合室でコーラを飲んでた。<sup>20</sup>ただのコーラを無重力下で飲むことが人類科学の結晶というのは、なんともおもしろいことだ。<sup>21</sup>コーラのような炭酸飲料を宇宙で飲むことは簡単じやない。このコーラの容器は宇宙で炭酸飲料を飲むために何百万ドルもの研究開発費をかけて開発されたものだ。<sup>22</sup>人間の身体は地球で生きるように最適化されている。<sup>23</sup>それだけじやない。人間が開発したあらゆるもの<sup>24</sup>が地球で使うことを前提に設計されてる。宇宙で暮らす<sup>25</sup>というのは、ほんとうにたいへんなことなのだ。

<sup>26</sup>ほどなくしてわたしが予約したソユーズが静止軌道ステーションに着いたことがアナウンスされたので、わたしはコーラの容器を洗浄機にいれ、搭乗口へ向かつた。

<sup>27</sup>着陸しないでもよければ、現代の技術なら数時間で月へ行くことができる。問題は着陸しようというときだ。<sup>28</sup>あまり探査機が速すぎると、月の重力をふりきつて通過してしまい、着陸することができるない。<sup>30</sup>そのため、月と地球を往復するのにかかる時間はアポロ計画のときからあまり変わつておらず、だいたい四日前後だ。<sup>31</sup>その四日のあいだ、広大な宇宙をソユーズという宇宙船のなかでわたしを含めて三名の同僚と過ごすのだ。

<sup>32</sup>ソユーズは二〇世紀にソ連が設計した探査機だけど、そのおそるべき信頼性から二〇七三年

現在でも現役で使われてる。<sup>33</sup> もつとも、現代で使われるソユーズはもともとのソユーズをさらに改良したもので、できるだけ部品を再利用できるような構造になつてる。<sup>34</sup> でも、基本的な構造は当時から変わつてない。

<sup>35</sup> ソユーズでいつしょにすごす同僚は、NASAに入局してから知りあつた先輩研究者たちで、同じ班の班員だ。<sup>36</sup> 主任含めて六人のチームで、わたしは新米の下っ端。<sup>37</sup> テーリにはお金さえあれば月へはだれでも行けるといつたけど、実際にはそんな簡単なことじやない。<sup>38</sup> ソユーズを操縦するにはそれなりに専門技術が必要で、素人が月へ行く場合、二名の宇宙飛行士を雇つて三人乗りのソユーズで行くことになる。<sup>39</sup> たしかにお金さえあれば月へはだれでも行けるけど、それこそヴエリティ並に稼いでないと無理だ。

わたしは重苦しい宇宙服を着て、二人の先輩といつしょにソユーズに乗つた。<sup>40</sup> 探査機が電磁カタパルトから発射されると、みるみるうちに地球が小さくなる。<sup>41</sup> その眺めを見るのは二度めだつた。<sup>42</sup> 最初見るとき感じたことは、美しい、だつた。<sup>43</sup> いま見るとなんとなく寂しいと感じる。<sup>44</sup> 月での暮らしが嫌になつたわけじやない。<sup>45</sup> でも地球から離れてみて初めて地球がいかに恵まれた環境だつたのかわかつたのだ。

<sup>46</sup> それから四日間、わたしは先輩たちと宇宙船で過ごした。<sup>47</sup> 先輩たちのことは嫌いじやない。でもやつぱりすこし距離を置いて話してしまうというか、テーリたちのようにうちとけて話す

ことはできない。

<sup>49</sup> それから四日経つて、ソユーズは月の裏側国際天文台近くの賢者の海のスペースポートに着陸した。<sup>50</sup> そこからは宇宙服を着たまま歩きで天文台に行く。月は大気が薄いため、地球よりも日光が強い。<sup>51</sup> そのため月で直射日光にあたるとただではすます、通常は夜間に着陸するよう日に程を調整する。月の夜は二週間も続くので、日程も二週間おきということになる。

<sup>52</sup> 月面の灰色の砂が一面に広がる世界は、写真で見るかぎりはロマンチックだ。<sup>53</sup> でも実際脚をつけて歩いてみると、そんなにいいものじやない。<sup>54</sup> なにしろ陽の光が見えたら最低でも失明はまぬがれないような世界なのだ。ここではわたしたち人間は、日光を避けて地中深くに隠れ住む、まるで吸血鬼のような存在だ。

<sup>55</sup> 天文台の宇宙望遠鏡は天体を観測するためのものなので月面にある。<sup>56</sup> でも、人間の居住地は賢者の海の溶岩洞という地下空洞に建設されてて、放射線から人間を守るようになつてる。<sup>57</sup> 天文台の宇宙望遠鏡はもともと無人での運用を想定されてて、賢者の海とはずいぶん離れた場所にある。<sup>58</sup> その宇宙望遠鏡が観測したデータを賢者の海の溶岩洞の地下空洞の居住区で分析するのだ。それだけならもちろん地球でもできるけど、月の環境でしかできない研究もあるため、月<sup>59</sup>での研究は有用と考えられる。

<sup>60</sup> ソユーズの数はかぎられてるため、みんなで交互に使う。今度はつぎに地球へ戻るひとがわ

たしたちの乗ってきたソユーズに乗るのだ。

<sup>64</sup> 賢者の海のスペースポートの近くに天文台の入口があつて、わたしたちはそこからエレベータに乗つて、地下へ向かつた。<sup>65</sup> 一五〇〇フィート近くあるエレベータだ。このエレベータはまだ放射線による汚染が激しいので、宇宙服を脱ぐことはできない。

<sup>66</sup> それから一五〇〇フィートもの長さのエレベータが最下層に着いた。<sup>67</sup> その地下空洞には要塞のよう重厚な壁に守られた人類の新たな生物圏がある。<sup>68</sup> すべての壁はまるみを帶びており、見ようによつては欧洲のお城のように見えなくもない。<sup>69</sup> アンテナのようなものはいつさいなく、なにもかもが有線で繋がれて、大量のコードを通すいくつもの土管が先ほどのエレベータが通過した縦孔を通つて蔓のように月面へ向かつてゆく。<sup>70</sup> まるで日光を求めて天高く伸びる植物のようだ。それが月の裏側国際天文台だ。

<sup>71</sup> わたしたちは月の裏側国際天文台のハッチからなかへ入つた。<sup>72</sup> まず最初に受けるのは宇宙服の除染だ。<sup>73</sup> それからもろもろ洗浄処理を受け、宇宙服を脱いでからもいろいろな处置を済ませ、最後に軽くシャワーを浴びる。<sup>74</sup> それからやつと天文台の受付へ入る。<sup>75</sup> そこでもまた書類上の手続き。これだけでも数時間かかる。

<sup>76</sup> 一カ月ぶりの月の裏側国際天文台だ。わたしは鼻から大きく息を吸つた。<sup>77</sup> 空気洗浄機のよい匂い。<sup>78</sup> これからまた二カ月ほど、ここで勤務することになる。

そして、わたしにはすることがあつた。<sup>83</sup>わたしは天文台に着いてから数日間綿密にプレゼンの方法を考え続けた。合長にタキオンを利用したSETIの計画を提案し、合長を説得してどうにかこの計画を実現させるのだ。<sup>84</sup>わたしの夢は、わたしひとりの力では実現できない。<sup>85</sup>多くの人々の協力が必要だ。

それからわたしは合長との予定をつけて、天文台に戻つてから数日後、天文台の合長室へ向かつた。わたしは合長室の扉を叩き、いつた。<sup>86</sup>「エマ・リバーズです。すこしお話が」<sup>87</sup>

<sup>88</sup>合長は答えた。「どうぞ」

この天文台の歴代の合長はJAXA出身のひとが多い。もともとこの天文台がJAXAによつて設計されたからだ。<sup>89</sup>わたしは合長に單刀直入にいつた。「今日は見てほしいものがあります」そしてわたしは合長にテーリが開発したタキオン検出装置を見せ、その基礎理論となつたわたしの論文のコピーやテーリが修正した理論のスケッチを見せた。「これがあれば、未来の知的生命体を観測することができます。わたしは新米ですが、自信をもつて新たな計画を提案します。この理論を応用して、未来の知的生命体からのメッセージを探査する計画を。しかし、そのためには資金も人員も、施設も必要です。どうかわたしにこの計画を担当させてください」

合長はいきなりの提案に目を丸くしてたけど、わたしの論文やテーリのスケッチを興味深そ  
さい」<sup>90</sup>

うに読んでいた。<sup>93</sup>わたしはどんな返答がくるか緊張し、汗がほおをつたつて顎からおちた気がした。<sup>94</sup>台長の返答はこうだつた。「理論については、興味深い。未来と過去の通信が可能となれば、さまざまな応用が考えられるでしよう。しかしながら、もはや宇宙人を探そうという時代ではありませんよ。それをやりたいなら一〇〇年過去へ戻るか、御自分の資産でやつてくれさい」<sup>95</sup>

わたしはその返答を、予想はしてた。だからがつかりはしなかつた。それからしばらくなんとか台長を説得しようといろいろ話したけど、結論は変わらなかつた。これ以上はしつこいと感じたので、わたしはあきらめ、退出することにした。<sup>96</sup>わたしはそのときやつとヴエリティのいつてたことが正しいとわかつたのだ。<sup>97</sup>やりたいことをやるために、お金がいる。必要になつてから貯めるのでは遅くて、彼女みたいにそれ自体が目的になつてしまふほど稼ぐほうが、結局最終的にはやりたいことがやれる自由が得れるのだと。<sup>98</sup>その事実を目前につきつけられた気がして、わたしはひたすら悔しかつたのだった。